

N・S・トゥルベツコイのユーラシア主義

－「国民国家」批判の視点に注目して－

浜 由樹子

序論

ロシアの自己認識において、ユーラシア主義は特別な位置を占める。ロシアは常にヨーロッパとの関係の中で、あるいはヨーロッパと自己を引き比べる中で、その自己認識を形成してきた。19世紀以来、あらゆる知識人を巻き込み、絶えず繰り返されてきた西欧主義とスラヴ主義の論争はその最たる例である。ロシア帝国の時代からソ連邦が崩壊した現在に至るまで、「ロシアとは何か」が機会あるごとに問われることは、それが今でもロシアにとっていかに重要な問いであるかを示している。その西欧主義とスラヴ主義という知的伝統の流れの中にありながら、既存の設定をはるかに超える広がりをもって、1920年代に一部亡命知識人の間から現れたのがユーラシア主義であった。

そもそもユーラシア主義とは、「ロシアはヨーロッパか、アジアか」という問いに対し、それを「ヨーロッパでもアジアでもないユーラシア」として定義した初めての思想であり、その本質を地域の民族的、文化的多様性に求めた概念である。ロシアの内なる「アジア」に目を向け、これを自分の一部として肯定的に評価するその世界観は、「アジア的要素」を「後進性」や「野蛮」と同一視し、否定してきたそれまでのロシア知識人の思想とは一線を画すものであったため、その新しさはこれまでも研究者の注意を惹き、ユーラシア主義の「思想的起源」をめぐる議論を喚起してきた¹⁾。しかし、思想研究者が行ってきたように、ユーラシア主義の思想の系譜を探り、ユーラシア主義をダニレフスキーやレオンチェフの流れを組むスラヴ主義の一派と説明するだけでは、なぜそのような世界観の転換がもたらされたのか、という問いに十分に答えられてはいないと思われる。しかも、ユーラシア主義の思想が提示する諸問題、例えば、多民族の共生、「国民国家」批判、西欧民主主義への挑戦、ヨーロッパに倣う近代化と国家や民族の自己認識の問題などは、スラヴ主義の流れを組む一部ロシア知識人の特殊個別な思想というよりもむしろ、今日の国際関係にも通じる現代世界の問題として考えるべきものであり、そのためにも従来のアプローチだけではとうてい不十分であるといえよう。

1 Nicholas Riazanovsky, "Prince N.S.Trubetskoï's 'Europe and Mankind'", *Jahrbucher fur Geschichte Osteuropas* 12 (1964), pp.207-220; Nicholas Riazanovsky, "The Emergence of Eurasianism," *California Slavic Studies* 5 (1967), pp.39-72; Nicholas Riazanovsky, "Asia through Russian Eyes," in Wayne S. Vucinich, ed., *Russia and Asia, Essays on the Influence of Russia on the Asian Peoples* (Hoover Institute Press, Stanford University, 1972), pp.3-29; V・ゼンコーフスキー著、高野雅之訳『ロシア思想家とヨーロッパ：ロシア思想家のヨーロッパ文化批判』現代思潮社、1973年；渡辺雅司「ロシア思想史におけるユーラシア主義」『ユーラシア研究』第27号、2002年、2-7頁。

1990年代以前のユーラシア主義に関する研究蓄積は概して少ない。その理由としては、第一にユーラシア主義が1930年代半ばには消滅してしまったこと、運動を担った人々が少数であったことが考えられる。第二に、思想史が一国史の枠の中で語られることによって、亡命知識人の思想や活動がそこから抜け落ちてしまったことが挙げられる。第三の理由は史料の出現状況にある。「反体制」「反動」などのレッテルを貼られて国外に追放され、あるいは亡命を余儀なくされた人々の著作が、ソ連時代に紹介されることがなかったのは想像に難くない。また、ユーラシア主義に関していうと、彼らの書いた物は、単著の形をとる場合を除いては、多くはヨーロッパ各地に散らばるロシア人亡命者コミュニティ向けの雑誌やパンフレットに掲載されたものであったため、その収集が困難だったことが考えられる。

しかし、この研究状況は1990年代に様変わりする。「グラスノスチ」を直接の契機にしたロシア国内でのユーラシア主義への関心の高まりは特筆すべきものであった。ロシアの思想界においては、ユーラシア主義者の思想を紹介することを主目的とした研究が数多く現れたが²⁾、その関心の高まりは思想以外の分野にも波及し、ユーラシア主義は広範に論じられた³⁾。この文脈の広がり、1990年代の議論の特徴である。このことが意味するのは、ソ連邦崩壊後のロシアにおける自己像の模索と、「冷戦構造」が消滅した世界における枠組みを求める動き⁴⁾が交錯したところで、新たな「ロシア像」を過去の歴史の中に求める心性に支えられ、再発見されたのが、ユーラシア主義であったということであろう。

ロシア国内でのこのような動向に注目し、ユーラシア主義について言及する研究がロシア以外の国の研究にも現れた。1990年代におけるユーラシア主義の「復権」という動向に注目したこれらの研究の多くは、ユーラシア主義を体制転換後のロシアにおけるアイデンティティの問題と絡ませ、あるいはロシアの「大国願望」として論じていた⁵⁾。しかし果たしてそれで充分であろうか。1920年代と1990年代という異なった時代を通じて、ユーラシア主義の思想の中に共有されるものは何かを問う以上は、ユーラシア主義そのものが、なぜ1920年代に生まれたのかを把握する必要があるのではないか。このことが重要なのは、一定の政治的意図を持って旧ソ連地域に「ユーラシア」を冠して論じるものにおいては、単に研

-
- 2 A.Soboleva, "Poliusa Evraziistva," *Novyi Mir* 1 (1991), pp.180-211; Igor' Isaev, "Evraziistvo, Mif ili Traditsiia?" *Kommunist* 12 (1991); *Istoricheskie Vzgliady Russkikh Emigrantov* (Moscow, 1992); *Rossiiia Mezhdru Evropy i Aziei: Evraziiskii Soblazn* (Moscow: Nauka, 1993); *Mir Rossii-Evraziia: Antologiiia* (Moscow: Vysshiaia Shkola, 1995) (以下 *Mir Rossii* と略); *Russkii Uzal Evraziistva: Vostok v Russkoi Mysli, Sbornik Trudov Evraziitsev* (Moscow: Belovodie, 1997); ドイツ人研究者の論文を翻訳したものと Le-onid Liuks, "Evraziistvo," *Voprosy Filosofii* 6 (1993), pp.105-114.
- 3 Roza Otunbaeva, "V Predverii Novovo Miroporiadka," *Muzhdunarodnaia Zhizn'* 3 (1991), pp.186-191; Aleksandr S. Panarin, "Rossiia v Evrazii: Geopoliticheskaia Vyzovy i Tsvivilizatsionnye Otvety," *Voprosy Filosofii* 12 (1994), pp.19-31; A. Ignatov, "'Evraziistvo' i Poisk Novoi Russkoi Kul'turnoi Identichnosti," *Voprosy Filosofii* 6 (1995); Aleksandr Dugin, *Osnovy Geopolitiki: Geopoliticheskoe Budushchee Rossii*, (Moscow: Arktogeia, 1997), pp.82-90.
- 4 国境を越えた地域主義の台頭、文明論の流行、地政学の復活などが挙げられる。
- 5 David Kerr, "The New Eurasianism, The Rise of Geopolitics in Russia's Foreign Policy," *Europe-Asia Studies* 47:6 (1995), pp.977-988; 広岡正久『「ユーラシア主義」とロシア国家像の転換：スラブ国家からユーラシア国家へ』『ロシアナショナリズムと政治文化：「双頭の鷲」とアイコン』創文社、2000年、51-90頁；大木昭男「ロシアにおける『第三の道』としてのユーラシア主義』『体制擁護と変革の思想』池庄司敬信編、中央大学社会科学研究所研究叢書10、中央大学出版部、2001年、277-306頁；堀江則雄「ユーラシア主義の系譜とブーテン」『ユーラシア研究』第27号、2002年、8-13頁。

究としての限界があるだけでなく、ユーラシア主義が本来の文脈から外れて理解される危惧もあるからである。

本論文の目的は、政治運動としての側面も併せ持ったユーラシア主義を、従来のような思想研究の枠組の中で説明するのではなく、一定の歴史的、地域的条件下に生まれた一歴史現象としてできる限り包括的に理解し、再評価することにある。上の問いに答えるにあたって、先行諸研究の中でも最も説得力を持つ方法論は、リャザノフスキーらの用いた歴史的手法であった。しかし、リャザノフスキー本人も認めるように、そこには「なぜ特定の世代の、数名のロシア知識人がユーラシア主義者になったのか」という疑問が残っている」のであり、この疑問に対する「十分な答えは、それぞれの個人のケースを詳細に研究して初めて得られるのかも知れない」⁶⁾のである。

「個人」を通じてユーラシア主義の形成と展開を追うというアプローチには、いくつかの利点がある。まず、思想内容、アプローチ共に多様な論者を擁するユーラシア主義のような思想運動の全体像を最初から把握することは困難であり、これまでもその多面性ゆえに部分的理解に留まる先行研究が多かった⁷⁾。共通項のみを抽出し、歴史的な文脈から外れたところで短絡的に理解してしまうという限界を越えるために、本論文では特定の論者を手がかりに、ユーラシア主義を内側から再構築するという方法をとる。そうすることで、思想としての形成と展開、政治状況に規定されることを避けられなかった側面を歴史的に描き出すことができるだろう。また、各国に散っていた亡命者たちのそれぞれに異なるであろう受容れ社会における経験も、彼らの思想が各々展開される上で影響を及ぼす要因として留意されなくてはならない。

さらにもう一つの利点は、「国民国家」から疎外された存在としての亡命者の視点を、「個人」としての思索の中に見出すことができるという点である。このような「個人」からの問題提起は、国家のあり方を問い直すにあたって積極的な意味を持ち得るであろうし、さらにそこには、あたかも世界地図を上から見下ろし分割していくかのような発想に対して、地域を内側から「個人」の発想に拠って再定義していくとする自発的な試みが見出せるのである。

ユーラシア主義には、哲学的、精神論的観点からヨーロッパ批判を行うことに重きをおいたグループと、「ヨーロッパとアジアの間」としての「ユーラシア」のイメージ形成に、より具体的にそれぞれの分野から貢献したグループとがあった。本論文では後者のグループから、言語学者としても有名なニコライ・トゥルベツコイを取り上げ、彼のユーラシア主義を中心に据えて考察を進めていくことにしたい。トゥルベツコイを扱う理由は、主に三点あ

6 Riazanovsky, "The Emergence of Eurasianism," p.72. ユーラシア主義者の一人を軸にした研究としては Charles J. Halperin, "Russia and the Steppe: George Vernadsky and Eurasianism," *Forshungen zur Osteuropaoshen Geschichte* 36 (1985), pp.53-194. が先鞭をつけている。

7 Sergei T. Utechin, *Russian Political Thought: A Concise History* (New York: Frederick A. Praeger Publisher, 1963), pp.256-261; Boris Ishboldin, "The Eurasian Movement," *The Russian Review* 5:2 (1946), pp.64-73; Robert C. Williams, *Culture in Exile, Russian Emigres in Germany, 1881-1941* (Ithaca: Cornell University Press, 1972), pp.242-275; 栗生沢猛夫「『東方への脱出』：ユーラシア主義の成立」共同研究『日本とロシア』東京、1987年、138-148頁；栗生沢猛夫「一ユーラシア主義者のロシア民族・文化論：N・S・トゥルベツコイ『ロシア人の自己認識の問題によせて』をめぐって」共同研究『ロシアと日本』第2集、東京、1990年、145-155頁。

る。第一に、彼はユーラシア主義の始祖の一人として、ユーラシア主義の歴史的起源を明らかにするために必要な論者である。第二に、ユーラシア主義の中核要素ともいえる彼の文化論は、国際関係研究において重要なテーマである近代「国民国家」批判としての意味を持つということである。そして第三に、他の論者に比べて史料に恵まれているということが挙げられる。ユーラシア主義の思想は、一面においては、亡命者によるロシアの「自己認識」の模索という内在的契機を得て生まれ、その発想は「ロシアはヨーロッパか、アジアか」という極めてロシア知識人的問題設定から出発したものである。他方でその展開は、史上初の社会主義国家の建設というロシア革命の衝撃を受け、植民地諸地域の抵抗と、形骸化した議会制民主主義への労働者階級の挑戦に動揺し、「西欧の没落」が喧伝される戦間期ヨーロッパの政治、社会状況と不可分の側面も持っていた。1920年代とは、第二次世界大戦へと向かう激動の時期に対して、その過渡期として位置付けられると同時に、新しい国際「秩序」を求めの中に様々な可能性を孕んでいた時期でもある。その潮流の中に位置付けると、ユーラシア主義者としてのトゥルベツコイの思想は、国境を越えて、地域をいかに再編するかをめぐる思想であったといえる。このような観点からユーラシア主義を考察することは、1920年代という時代を再検討すること、地域の視点から近代国際関係を問い直すことにもつながるであろう。

本論文ではまず、第1章においてユーラシア主義の運動としての歴史と、その展開を概観する。第2章ではトゥルベツコイのユーラシア主義者としての世界観がどのように確立したのかを伝記的叙述を通じて追い、第3章、第4章では彼の思想とその展開を論じる。

1. 政治運動としてのユーラシア主義の展開

ユーラシア主義は、1921年ブルガリアのソフィアで論文集『東方への旅立ち (Iskhod k Vostoku)』が刊行されたことをもって始まったとされる⁸⁾。その執筆者は、経済学者で地政学者のピョートル・N・サヴィツキー (Savitskii)、言語学者のニコライ・S・トゥルベツコイ (Trubetskoi)、宗教哲学を専門とする思想史家のゲオルギー・V・フロロフスキー (Florovskii)、芸術学者で音楽評論家のピョートル・P・スヴチンスキー (Suvchinskii) の4人であった。

1920年代を通じてこの思想運動は、革命と内戦によりヨーロッパに亡命したロシアの知識人の間に広がっていった。1922年には最初のシンポジウムが開かれ、メンバーに宗教学者のA・V・カルタシェフ (Kartashev) と歴史学者のP・M・ピツィリ (Bitsilli) を加えて論文集『途上にて (Na Putiakh)』を発行する⁹⁾。1925年には主要メンバーとなる宗教学者のレフ・P・カルサーヴィン (Karsavin)、歴史学者のゲオルギー・V・ヴェルナツキー (Vernadskii)、文芸評論家・文学者のドミトリー・S・ミルスキー (Mirskii) が、1927年には法学者・政治学者のニコライ・N・アレクセーエフ (Alekseev) が運動に加わった¹⁰⁾。

出版、セミナーの開催、公開討論などの活動は主に、ロシア人亡命者のコミュニティが

8 Joseph L. Wiczyński ed., *The Modern Encyclopedia of Russia and Soviet History* 11 (Academic International Press, 1979), pp.6-8.

9 しかしこの2人は、運動からはすぐに脱退した。

10 Riazanovsky, "The Emergence of Eurasianism," pp.46-47.

特に大きかったパリ、プラハ、ベルリンを中心に、ソフィア、ブリュッセルなどで展開された。なかでも出版活動の中心となったのはパリであった。出版活動は、思想を広めるという目的は当然ながら、読者の購読料が運動の資金源となるという経済的效果もあって、積極的に行われた。その主なものとしては、1923年から27年にかけてサヴィツキー、トゥルベツコイ、スヴチンスキーの編集により1号から5号まで刊行された『ユーラシア通報 (Evraziiskii Vremennik)』、1924年から29年にかけて1号から10号まで、1935年から37年に11号、12号が出版された『ユーラシアクロニクル (Evraziiskaia Khronika)』が挙げられる⁽¹¹⁾。その他、1923年にはシンポジウムの成果として『ロシアとラテン (Rossiia i Latinstvo)』、1926年の綱領的文書といわれる『ユーラシア主義一体系的叙述の試み (Evraziistvo: Opyt Sistematicheskogo Izlozheniia)』、1931年には10周年記念文書の『30年代 (Tridtsaty Gody)』などが出された。

ユーラシア主義は、単なる思想、文芸運動だけにとどまらず、広義の意味での政治運動としての側面も持っていた。彼らは誌上で、ソヴェト政権についての見解を様々に展開し、それとの関わり方について積極的に議論し、言論活動を行った。当初ユーラシア主義者たちは、ソヴェトの指導者たちは西欧からの借り物である共産主義という誤ったイデオロギーにのっとっており、真にロシアのあるべき姿を理解している亡命者こそが体制の崩壊をもたらす、あるいはその後の舵取りをするべきである点で概ね一致していた。やがて、様々な反ソヴェトの活動グループと関わりながら、ソヴェト政権内部への実際の働きかけを通じて内側からの変革を目指すようになるのである。

その一例として、1920年代初頭のヨーロッパに現れた、帝政支持者を中心とする反ソヴェト組織「トレスト (Trest)」との関わりが挙げられる。「トレスト」のメンバーがユーラシア主義の思想に影響を受けたことから、1922年ごろより両者は接触し始め、共に活動するようになったが、目的意識の違いなどから協調関係ははかばかしくなく、結局は1926年に決別した⁽¹²⁾。それ以来、ユーラシア主義者は反ソヴェトの政治組織と組むことを諦め、言論活動に重点を移すようになった。ユーラシア主義の思想を展開しつつ、「ロシアを分裂から守る」ために、「真の国益を代表する政党がボリシェビキに取って代わるべき」ことを呼びかけるリーフレットの発行がその中心となったのである⁽¹³⁾。

しかし1920年代中頃から、ソ連国内の変化、すなわち、一国社会主義論の登場や、ナショナリズムの高揚ともみえる雰囲気の変化を受け、ユーラシア主義者のグループ内に変化が生じ始めた。まず、メンバーの多数が「ソヴェト体制はインターナショナルリストからナショナルリストへ変容しつつある」とみなすようになり、中には少なからぬ共感をおぼえる者もあった。また、ソヴェト政権が革命当初の内外の予想に反して安定したのようになってきたとい

11 *Mir Rossii*, pp.391-392.

12 Dmitry Shlapentokh, "Eurasianism: Past and Present," *Communist and Post-Communist Studies* 30:2 (1997), pp.131-132. 運動の実態を知るための資料としては、ロシア連邦国立文書館 (GARF) 所蔵のサヴィツキー・コレクション (fond 5783 [Savitskii]) とチヘイゼ・コレクション (fond 5911 [Chkheidze]) が存在するが、筆者が訪れた折にはマイクロフィルム化の作業中で閲覧することが不可能であったため、ここでは一次資料に基づいた最も詳細な実証研究である上の論文に多くを依拠することとする。なお、これらのコレクションは第二次世界大戦時にソ連軍がプラハより持ち出したものであり、残された資料は現在プラハのスラヴ図書館、文学資料館にも収められている。

13 Shlapentokh, "Eurasianism," p.133.

う見解が共有されており、一部のメンバーが、一国社会主義へと向かう動きを支持するソヴェト体制の指導層と手を組むべきだと考えるようになったという事実が指摘される⁽¹⁴⁾。

この背景としては、ソヴェト政権を短命なものと考え、あるいはソヴェト政権に対抗するために、敵対する組織を支持するという目的から亡命者の運動に援助をしていたといわれる各国政府の姿勢の変化もあった。ロシア人亡命者に手厚い保護をしていたといわれるチェコスロヴァキア⁽¹⁵⁾は、ソ連の国家としての安定性を見越して両国の関係改善に踏み切るという流れの中で、おそらくはその後のソ連との関係への配慮から、1927年にロシア人亡命者への財政的支援を打ち切った。またドイツでは、ロマノフ王朝の血縁者を擁立し、N・マルコフを代表に王朝復活を掲げる君主制支持者が1921年以来ベルリンで活動していたが、同じく1927年になって活動を禁止された⁽¹⁶⁾。財政的援助を中断されただけでなく、活動の場と容認を失ったことにより、一部の活動家たちは戦略の転換を余儀なくされたのである。

ユーラシア主義者のなかでも特にスヴチンスキーは、ユーラシア主義の「左派」グループを形成し、持論を展開していった。それによると彼は、ソ連国内におけるナショナリズムの雰囲気の高まりの中に新体制への転換の可能性を見だし、転換後の体制で権力を握るためにはその中でイデオログとしての役割を果たすことが必要だと考えていた。体制内に同調者を見付けて取り入れるためにもユーラシア主義は共産主義運動を自称するべきであるとして、まずは彼自身が「マルクス主義者」と称し、次にミルスキーと協力してユーラシア主義とマルクス主義を融合させることを試みた。その例が、ユーラシア主義者の多くが同調していたフォードロフの思想を組み合わせる試みであった⁽¹⁷⁾。そこには、スヴチンスキーが思想そのものを極めて戦略的なものとして考えていたことが窺われる。このような彼の行動と、ユーラシア主義者が批判対象としていた共産主義への傾斜に、サヴィツキー、トゥルベツコイを中心とするグループは反対の姿勢を示し、スヴチンスキーらとの対立が決定的になった⁽¹⁸⁾。後にこのような動きに対してトゥルベツコイは、「ユーラシア主義の中のある潮流が…マルクス主義やフォードロフ主義といった、ユーラシア主義とは何の関係もない学説を、ユーラシア主義のイデオロギーに替えようとしている」と抗議している⁽¹⁹⁾。

スヴチンスキーが主導的立場にあったグループはパリを中心に活動していたため、運動の財源と印刷技術がある程度手中におさめることに成功し、それを利用しつつ独自の政策を展開していった。彼はまず、ソヴェト政権に接近するべく、商用などでヨーロッパを訪れた人物に接触しては、ユーラシア主義は「新しいタイプのナショナリズム的マルクス主義」であると宣伝し、また、ユーラシア主義がソヴェト市民にも受容られるようになるべきであるとする主旨の発言をグループ内外で重ねるようになる⁽²⁰⁾。そして、1926年7月から28年ま

14 Shlapentokh, "Eurasianism," pp.133,135-136. この変化は、スヴチンスキーが率いるグループに、「道標転換派」のウストリヤロフへの接近と傾倒を促したという。

15 T. Riha, "Russian Emigre Scholars in Prague after World War 1," *The Slavic and East European Journal* 16 (1958), pp.22-23.

16 John J. Stephan, *The Russian Fascists, Tragedy and Farce in Exile 1925-1945* (Harper and Row Publishers, 1978), p.13.

17 Shlapentokh, "Eurasianism," pp.136-137. フォードロフと共産主義の共通点については、例えばベルジャーエフ著、田口貞夫訳『ロシア思想史』創文社、1958年、243-247頁を参照。

18 Shlapentokh, "Eurasianism," p.137.

19 Nikolai S. Trubetskoi, "Pis'mo v Redaktsiiu," in *Mir Rossii*, pp.300-301.

20 Shlapentokh, "Eurasianism," p.138.

で、1年に1号ずつ、3度に渡ってきわめて親ソヴェト的（Pro-Soviet）出版物『ヴォールスチ（露里）（Versty）』を刊行した⁽²¹⁾。スヴチンスキーはさらに、発行予定だった機関紙『ユーラシア（Evraziia）』の編集を取り仕切っていたアレクセーエフをトップから追いやり、これを自分の影響下におさめた⁽²²⁾。

1928年、サヴィツキーは、この分裂による運動そのものの崩壊を避けるため、2度会合を開こうと試みたが、それも結局開かれることはなかった。

その頃『ユーラシア』紙は、スヴチンスキーの思惑通り既に「親ソ」的な内容になっていたが、まさにそれがために、共産主義革命を志向する動きに強い警戒感を示していた各国でユーラシア主義者はブラックリストに載ることとなり、亡命者コミュニティからの購読、支持をかえって受けられなくなってきていた。その上に、財政難の状況に大恐慌が追い討ちをかけた。購読者数は減り、ソ連のプロパガンダ活動をする他の運動のようにソヴェト政府からの補助金も受けていなかったユーラシア主義運動の財政は困窮した⁽²³⁾。

こうした状況の下、35号の発行を数えたものの、1929年ついに『ユーラシア』は廃刊となる。スヴチンスキーはトゥルベツコイへの接近などの手を講じたが成功せず、サヴィツキーはこの失敗を攻撃の対象としてスヴチンスキーのグループを批判し、財政上の権限を取り戻した⁽²⁴⁾。

しかし、権力をめぐる内輪もめやイデオロギー的分裂に嫌気がさした主要メンバーが運動の意義に疑問を覚えて去っていった。特に、トゥルベツコイとフロロフスキーの離脱は運動にとって非常な痛手となったといえるだろう。

それでも運動そのものが生き残った理由は、新しい支持層の登場、つまり亡命者の子供たちの世代からの支持であった⁽²⁵⁾。革命前のロシアに親しみは覚ええないが、西欧の価値観にも違和感をおぼえ、やはり自分たちの「祖国」はロシアにあると思っていた彼らの心を、「革命後」のロシアを考えるユーラシア主義のイデオロギーが惹きつけたのである。

1931年9月、サヴィツキーは会議を開催し、そこで自分の権力基盤を固め、運動を立て直そうとした。しかし今度は、ファシズム支持者のグループが台頭するという新たな分裂の危機に直面することになった。ヨーロッパではファシズムの台頭が目立ち始めており、それが亡命者の考え方にも多大な影響を及ぼしたという⁽²⁶⁾。形骸化した議会制民主主義に異議を唱え、一般大衆の不满を「指導者原理」を通して汲み上げる強力な体制と、ナショナリズムに訴えかけることで、自分たちに過酷な条件を強いてきたヴェルサイユ体制の支配を打破しようとするファシズム国家に、外国勢力に対抗する強い祖国というイメージを彼らは重ね合わせていたのである。ユーラシア主義内のこのグループは、このような観点からスターリン体制を積極的に肯定する方向へと動いていた。ユーラシア主義者の中でも最も強くその影

21 *Mir Rossii*, p.392.

22 Shlapentokh, "Eurasianism," p.138.

23 Shlapentokh "Eurasianism," pp.139-140.

24 Shlapentokh "Eurasianism," pp.141-143; Petr N. Savitskii, "Gazeta 'Evraziia' ne est' evraziiskii organ," in *Mir Rossii*, pp.304-312.

25 Shlapentokh, "Eurasianism," p.144. 例えば、哲学者イリインの親戚であるN.ポルトラツキーの参加が知られる。ポルトラツキーは運動から離れた後、アメリカに渡ってミシガン大学で教鞭をとり、イリイン・アーカイヴズの責任者となる。ベレストロイカ期によく祖国を訪れ、その地で亡くなった。

26 Stephan, *The Russian Fascists*.

響を受けたのが、ブリュッセルのグループである。彼らは、共産主義者と協力し、より積極的にソ連国内にユーラシア主義の思想を広め、「細胞」を作ることを主張し始めた。また、このグループは、独自に刊行した機関紙に5年間に渡って『プラウダ』の記事を転載し続けた。同時に、その動きに加わるかたちでスヴチンスキーらが新たな支持者を集め、「新ユーラシア主義」と称するグループを形成しようとしていた⁽²⁷⁾。

彼らとは違う道を進む者も現れた。例えば、ユーラシア主義のあり方に不満を覚えながら活動するうちに、ソヴェトの秘密警察のエージェントになったペルフィリエフ (Perfil'ev)⁽²⁸⁾、最終的にマルクス主義に傾倒し、移住先のイギリスで共産党に入党したミルスキーなどである。

こうして、ユーラシア主義の運動は内部分裂し、第二次世界大戦の開始とともに消滅していったのである。

スヴチンスキーが何を考えていたのか、確かなことを知ることはできない。ただ、この当時亡命者の一部にあった動きから推測できるのは、ウストリヤーフがそうであったといわれるように⁽²⁹⁾、彼がソ連に帰ることを企図していたのではないかということ、無事に帰国した暁にはソヴェト政府に重用されることを目的に活動を展開し、ソヴェト寄りの主張を強めていったのではないだろうかということである。

学問と政治のあまりに密接な関係を懸念していたトゥルベツコイのような論者を擁しながら⁽³⁰⁾、ユーラシア主義が政治運動として多くの参加者や支持者を集めるに至った最大の理由は、多くの帝政支持者のように革命の現実を否定することや、あるいは単に現状を静観するに留まらず、彼らが「ロシアの未来」を積極的かつ具体的に描こうとしたためである。本来、権力からは最も遠いところに追いやられたはずの亡命者たちが、自分たちをその権力に最も近いかのように感じ、可能性を追っていた理由には、ソヴェト政権による支配が革命直後はまだ確固としたものにはなっていなかったことが大きい。そこには、遠からず政権を転覆して自分が返り咲くこと、あるいは権力を握ることを期待させるには十分な状態があった。そして、彼らにとって運動を可能にしていたのは、物質的には各国政府や反革命を唱える人々からの援助であり、精神的には、亡命者としての生活に運動への参加を通じて何らかの意味を見出したいという思いであっただろう。しかし同時に、時代状況の変化に規定されざるを得ない側面もあった。彼らの期待に反してソヴェト政権は国内での支配を確立し、国家としてのソ連は存続しヨーロッパの各国と関係を次々と確立していった。そして「民族的愛国主義にとって強大な魅力」⁽³¹⁾であったと評される一国社会主義論の登場は、この行き詰まりに新しい展開を用意した。これを機にソ連への賛同を示すグループが現れ、内部分裂と対立の傾向はファシズムへの共鳴のもとで勢いを増した。また、彼らを取り巻く外的条件も大きく変化していた。ロシア革命に対する恐怖や期待、ソヴェト政権に対する各国の対応と

27 Shlapentokh, "Eurasianism," pp.144-147.

28 Shlapentokh, "Eurasianism," p.147.

29 Mikhail Agursky, *The Third Rome: National Bolshevism in the USSR* (Boulder: Westview Press, 1987), pp.240-263.

30 ウラディーミル・ディヤコフ著、早坂真理・加藤史朗訳『スラヴ世界：革命前ロシアの社会思想史から』彩流社、1996年、334頁。

31 エドワード・H・カー著、塩川伸明訳『ロシア革命：レーニンからスターリンへ、1917年-1929年』岩波現代文庫 学術11、岩波書店、2000年、107頁。

国家間関係の変化、第一次世界大戦後の各国の経済状況と世界恐慌、そしてそれら全てが社会に及ぼした影響が、彼らが活動をするための状況を規定したのである。ユーラシア主義に限らず亡命者たちの政治運動は、その意味では、ロシア革命に対する人々のそれぞれの反応であったと同時に、戦間期ヨーロッパの産物であったと解釈できよう。

2. トウルベツコイの生涯

この章では、トゥルベツコイのユーラシア主義者としての問題意識を掘り起こし、それがどのように培われたのかを概評するが、前提として、トゥルベツコイに関する史料の出現状況について述べておきたい。トゥルベツコイの著作は基本的に、活字になって発表されたもの以外はほとんど残っていない。まず、モスクワ時代に書かれたもののうちで残っているのは、雑誌に掲載された論文が唯一である。革命から亡命までの期間滞在していたロストフでの研究やノートは、亡命の際ドンスコイ大学の図書館に預けられたが、第二次世界大戦の戦火で焼失している。ウィーン時代に記された手稿などは、1938年、オーストリアに入ったゲシュタポの手によって持ち去られ、同じく第二次世界大戦下の空襲によって焼失した。よって、トゥルベツコイのユーラシア主義に関する史料としては、ヨーロッパ各都市で出された一連の出版物、ヤコブソンの編集による書簡集、モスクワのロシア連邦国立文書館に収められているサヴィツキー・コレクションに所収の書簡などが、現在把握されている主なものである。ここでの情報は主に、現時点では最も詳細なものであると考えられるリーベルマンによる伝記⁽³²⁾と、ヤコブソンの編集した書簡集⁽³³⁾、歴史事典⁽³⁴⁾などに依拠している。

ニコライ・セルゲイヴィチ・トゥルベツコイは、1890年4月16日、モスクワでリトアニア系貴族の血を引く名門トゥルベツコイ家に生まれた。モスクワ大学の学長でもあった父親のセルゲイ、セルゲイと兄弟の中では最も仲の良かった叔父のエフゲニーはいずれも著名な哲学者であり、ニコライが早くから学問に携わることのできる環境にあったといえる。敬虔な正教徒の家庭に育ち、また宗教哲学を専門にしていた父親の影響もあり、宗教、特にキリスト教、及びキリスト教と他の宗教との関係には早くから興味を持った。後にエフゲニーの主催する宗教学・哲学サークルにも参加している。ニコライが15歳の時に父を亡くしていることもあり、父セルゲイからの思想的影響については定かではない。しかし、ナショナリズム論における叔父エフゲニーとの思想上の共通点⁽³⁵⁾、モスクワ公国時代の宗教美術に関する造詣の深さは、ニコライの思想形成におけるエフゲニーからの影響として、指摘するに値するだろう。この時期の読書歴や、影響を受けた本などについては明らかではないが、セルゲイとエフゲニーが10代の時分に読んでいたのがカントやショーペンハウアーであり、そ

32 Anatoly Liberman, "N. S. Trubetzkoy and His Works on History and Politics," in Anatoly Liberman, ed., Nikolai S. Trubetzkoy, *The Legacy of Genghis Khan*, (Ann Arbor: Michigan Slavic Publication, 1991); Anatoly Liberman, "Trubetzkoy as a Literary Scholar," in Anatoly Liberman, ed., *Nikolai S. Trubetzkoy, Writings on Literature* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1990).

33 N.S. Trubetzkoy's *Letters and Notes*, Prepared for publication by Roman Jakobson with the assistance of H. Baran, O. Ronen and M. Taylor, (Hague: Mouton, 1975) (以下、*Letters and Notes* と略)。

34 A.A. Chernobaeva, ed., *Istoriki Rossii: Biografii* (Moscow, 2001).

35 高野雅之『ロシア思想史：メシアニズムの系譜』早稲田大学出版部、1998年、382-389頁。

の後ソロヴィヨフとドストエフスキーに傾倒していることから³⁶⁾、ドイツの思想家のものや、一連のスラヴ主義者の著作を手にとる機会には恵まれていたと推測される。2人がソロヴィヨフの思想から受けた影響と、ニコライの思想とのつながりを強調する研究者もいる³⁷⁾。

ニコライは学校には通わず、必要な教育は家庭教師から受けていた。モスクワのギムナジウムには試験を受けるためだけに行っていたという。13歳頃から民俗学に興味を持ち始め、14歳から著名な研究者の多く所属する学術サークルの活動に参加し、最初の論文を15歳で発表した。その早熟と天才ぶりを示すエピソードには事欠かない。彼の最初の論文は、異教の葬式を表現したフィン語系民族の歌を解釈したものであった³⁸⁾。以降、論文は約1年ごとに『民族誌学時評 (Etnograficheskoe Obozrenie)』に掲載され、そこからは当時の彼の関心が、ウゴル・フィン語系民族、カフカス地域、シベリア地域といった、ロシア帝国内の非ロシア民族や少数民族の文化、民俗、言語にあったことが窺い知れる。特に、オセチア系言語の専門家であり、叙事詩の研究で知られる民俗学者V・F・ミラー (Vsevolod F. Miller) に啓発されたカフカスの言語、文化への興味は生涯続くものとなった。また、ミラーとのつながりと同様に重要な関係として、民族誌学者であり考古学者でもあるS・K・クズネツォフ (Stefan K. Kuznetsov) から直接学問的な指導を受けていたことが挙げられる。このクズネツォフのすすめで、彼は17歳の時、カムチャッカ先住民 (kamchadal'skii) の言語の辞書と、短い文法概説書を編纂した。その他にも、後年の記述からは、彼が大学入学以前から既に、古代ブルガリア語やモルドヴァ語にも親しんでいたことがわかる³⁹⁾。

1908年、モスクワ大学に入学したトゥルベツコイは、哲学・心理学部に入ったがすぐに転向し、言語学を専攻として選んだ。しかし、大学における言語学の主流がインド・ヨーロッパ系言語であったことに不満を感じ、自分の興味対象であるカフカス地域の言語、民俗についての研究も独自に進めていた。彼の言語学への関心は、ディシプリンとしてというよりもむしろ、非ロシア民族の文化を分析するための道具としての部分にあったという指摘もある⁴⁰⁾。さらに言語学の方法論についても、比較方法論が主流であったこの時期既に、言語学こそ科学的アプローチを用いることが可能だという見解を持っていたともいわれる⁴¹⁾。しかし同時に、彼の文化観、つまり、文化とは異質で新しい他の要素と出会い、融合しなが

36 Martha Bohachevsky-Chomiak, *Sergei N. Trubetskoi: An Intellectual among the Intelligentsia in Prerevolutionary Russia* (Belmont: Nordland Publishing Company, 1976), pp.21-32.

37 Riazanovsky, "Prince N.S.Trubetskoy's 'Europe and Mankind,'" p.220.

38 1933年に彼がフィン・ウゴル協会の準会員に選ばれた際、民俗学者のミッコラに宛てた礼状の中で、この最初の研究と関心について、「ウゴル・フィンとその生活様式、言語、精神文化に対する興味は大変早くからあり…ギムナジウムの5年生の時には既に、カレワラとウゴル・フィンの民俗に夢中になった」と述懐している。ちなみに、トゥルベツコイは通常、「ウゴル・フィン」という用語を使うが、この協会の名称にあたっては「フィン・ウゴル」の順に直して使っている。Letters and Notes, pp.455-456.

39 Letters and Notes, pp.445, 455.

40 Liberman, "N.S.Trubetskoy and His Works," p.365.

41 科学的方法論の意味については、後年以下のように語っている。「様々な国の文化の進化には平行性があることに疑問の余地はない。その平行性をつかさどる法則もまた存在する。例えば、デルジャーヴィンからマヤコフスキーに至るロシアの詩の進化は、完全に論理的で理に叶ったものであり、この進化を文学抜きの実事から『引き出す』べきではない。しかし同時に、象徴主義の最盛期が革命前夜の時期と一致するのも、未来主義の最盛期がポリシェビズムの初期と一致するのも、もちろん偶然ではない。文学を政治で説明することは(あるいはその逆も)間違っているが、そのつながりは明らかにされるべきである。文学や政治の外に立つ特別な科学が必要で、きわめて総合的に進化の平行性を研究すべきなのである。これら

ら常に発展するが、核の部分は確実に継承され続けるものだという見解から推察すると、言語こそが文化の粹たるものだという考えに至ったとも考えられる。もっとも、ロシアの学界自体が、19世紀以来の言語を重視した文化研究の潮流⁽⁴²⁾の外にはなかったことも、学問的背景として見落とされるべきではない。

トゥルベツコイは1913年に研究成果として、宗教史、民俗学、文法論に関する3本の論文を発表し、ドイツへ派遣留学、ライプツィヒ大学で言語学の講義を聴講している。1915年には修士号を取得し、1916年からインド・ヨーロッパ語の比較言語学科の専任講師として、サンスクリット、ヴェーダ研究、共通基語についての講義を担当した。

1917年頃より健康を害したために、秋から休暇をとり、キスロヴォツクで療養していたが、その滞在中に十月革命とそれに続く内戦が起こった。貴族であることと、リベラルとしても有名であった父親の名声から、モスクワへ帰還することは危険であったため、そこから白軍とともに南へ徐々に移動し、ティフリスから1918年にはバクーへ、そこを經由してからロストフに移った。ロストフではドンスコイ大学で職を得て、言語学の基礎、比較音声学、初級サンスクリットなどの講座を担当し、並行してロストフの女子学校で、1919年にはノヴォチェルカスクでも教壇に立った。しかし、1920年にロストフは赤軍に掌握され、彼はクリミア、ヤルタ、コンスタンチノーブルを経て1920年2月にブルガリアへと亡命した⁽⁴³⁾。ブルガリアの難民キャンプから職を求めて知人の教授に宛てて書いた書簡の中で、彼は自分の関心とその変遷を以下のようにまとめている。「私の学問的関心と研究は、常に民族誌学と言語学の分野にあり、インド・ヨーロッパ語を除く他の語族、ウゴル・フィン、チュルク、カフカスを研究してきました。…チェルケスの文法書と辞書を編纂し、東カフカスの比較音声学を仕上げた後、北カフカスの比較文法に着手しました。…インド・ヨーロッパ語からはまず、古代インド語とイラン語を学びましたが、最近ではスラヴ系諸語に注意を向けています。学位論文の主題として私が選んだのは、『共通スラヴ祖語の発生と分解の歴史』です。…言語学以外にも、民族誌学、民俗学、宗教史を学んでいます。」⁽⁴⁴⁾

亡命先のブルガリアではソフィア大学で職を得て、1920年から2年間、比較言語学とインド宗教思想史等の講座を担当した。しかし、ソフィアでの日々は、知的側面において彼にとって満足いくものではなく、生活においても苦しかったので、そこに長く留まる意思はなかったようである⁽⁴⁵⁾。ここでの2年間で重要だった出来事は、彼が「ユーラシア主義の先駆

は全て言語にもあてはまる。」単に言語における「進化論」的な興味からだけではなく、ロシアにおける文化のあり方を意識したロシア知識人としての視点から、科学的方法論の意味を説明した重要な一文であるといえよう。 *Letters and Notes*, pp.97-98.

42 民族分布の複雑な中・東欧地域において、言語が諸民族集団の分類や自己認識の形成に力を持ったことは、しばしばヘルダーの影響とも関連づけて論じられる。Hans Koln, *Nationalism: Its Meaning and History*, rev. ed. (Princeton: D. Van Nostrand Company, 1965), pp.44-53; Hugh Seton-Watson, *Nations and States: An Enquiry into the Origins of Nations and the Politics of Nationalism* (London: Methuen, 1977), pp.6, 118-120, 148ff.

43 その他の家族の消息としては、叔父のエフゲニーがノヴォロシースクでチフスにより死去し、もう一人の叔父にあたるグレゴリーはウィーンに、妹のマリヤはフランスに亡命した。ロシア国内に残った弟のウラディーミルは、1930年代に家族ともども粛清された。トゥルベツコイは、弟ウラディーミルとその娘がトゥルケスタンに流刑になった知らせを受けたこと、モラヴィアに会いに行きたいと考えている旨を、1934年5月付けの書簡の中に記している。 *Letters and Notes*, p.305.

44 *Letters and Notes*, pp.446-447.

45 *Letters and Notes*, pp.2-5.

け」と評される『ヨーロッパと人類』を執筆、出版し、その思想に共鳴した人々と共にユーラシア主義の創始に携わったことである⁽⁴⁶⁾。また、ブルガリアで出版されたロシア語版、H・G・ウェルズの『影の中のロシア』に前書きを寄せたことも、興味深い事実である。

ソフィア大学との契約が切れてからはブルガリアを出てオーストリアに移り、1922年からウィーン大学に迎えられた。そこではスラヴの比較文献学、スラヴ言語の構造と歴史、スラヴ文学等を教えたが、中でも音韻論のコースは人気を博した。また、同様に人気の高かったロシア文学についての一連の講義は、彼の死後、同僚とトゥルベツカヤ夫人によって発表されているが、それらはトゥルベツコイの文献学者としての能力の高さをも証明するものである。ウィーン大学での年月に彼が生み出した研究成果は多く、言語学の理論、カフカスの言語、亡命する以前からの同僚であったヤコブソンとの協同で築いた音韻論における業績、ユーラシア主義、ロシア史、ロシア文学に関する著作、論文などが挙げられ、その数は111本にのぼる。特に、1926年に創設され、彼が中心となって活動した言語学のプラハ学派は構造主義の先駆けとして高く評価されている。この間に言語学者としての彼の名声と評価は確たるものとなり、ウィーン科学アカデミーに、1925年に準会員として、1930年には正会員として迎えられた。

しかし、ユーラシア主義の運動からは、運動内部の分裂と過度の政治化、ソ連寄りに傾いたスヴチンスキー・グループがユーラシア主義を名乗ることへの批判から、1929年に脱退する⁽⁴⁷⁾。1930年代に入ってから、ユーラシア主義を掲げる言論活動に参加することはもはやなかったが、ただ、かつてユーラシア主義の中で展開されていた「理念統治」とアウトアルキーについて書いた論考を数本発表している。

1930年代にはかねてから病んでいた心臓の病状が悪化し、視力の低下もひどく進んだ上、ナチズムの台頭が、その反対者であった彼の政治的立場を追い詰めることになった。彼にとってナチズムとは、後述するように、一つの人種、民族が他の何者にも勝って優れていると主張し、周囲にあらゆる形でそれを強制するという、彼の知的基盤から考えても論理的に最も認めることのできないロマンス・ゲルマンの「自己中心主義」の現れだったのである⁽⁴⁸⁾。ナチスのウィーン大学への浸透が進む中、1934年には、プフィッツナーというナチ党員の歴史家が東ヨーロッパ史学科の空いたポストに就くことをトゥルベツコイが妨害しようとし

46 『東方への旅立ち』出版当初、ユーラシア主義について、「それぞれが自分のアプローチと信念を持っているにも拘わらず、我々は共通の気運と『現実認識』において一致した。…その本質は、我々が『ユーラシア』という用語で言い表している新しい方向への、道の探求と敷設にある。もしかしたらそう成功してはいないかも知れないが、しかしそこには目を射るようなアピールがあり、それゆえに、アジテーション目的には適しているだろう。そのような気配はある。」と、ユーラシア主義が潜在的に持つ政治傾向についても冷静に述べている。 *Letters and Notes*, p.21.

47 脱退を表明する編集部への手紙には、「イデオロギーにおける意見の不一致が和解不可能なところまで至った」ことに対する遺憾の意が表されている。「私がその下でこそユーラシア主義に参加することができた、かつての内的一体感と、信念の差異、それを取り戻すことはもはや不可能であることを認め、私は『ユーラシア』紙と、ユーラシア主義の組織からの脱退を表明する。…（一連の論文に著してきた）私のこれまでの信条を否定はしないが、しかしこの条件下では、今のユーラシア主義の進化に責任をもつことはできないし、したくないのである。」 Trubetskoi, “Pis'mo v Redaktsiiu,” in *Mir Rossii*, pp.300-301.

48 例えば、Nikolai S. Trubetskoi, “Ob Idee-pravitel'nitse Ideokraticeskogo Gosudarstva,” *Evraziiskaia Khronika* 11 (1935), Reprinted in *Nasledie Chingiskhana* (Moscow: Agraf, 2000) (以下 *Nasledie* と略), pp.518-525; “O Rasizme,” *Evraziiskie Tetradi* 5 (1935), Reprinted in *Nasledie*, pp.532-542.

たというエピソードも残っており⁴⁹⁾、また言語学の分野においても、インド・ヨーロッパ語の起源はドイツにあるとするナチスの理論に機会あるごとに対抗していたといわれる。このような主張は、ナチスが力を増すオーストリアにあって、当然トゥルベツコイを追い詰めるものであった。1938年3月、トゥルベツコイは病状が悪化して入院するが、その直後にドイツがオーストリアを併合した。ドイツ軍がウィーンに入ってから、彼はナチスの反対者としてゲシュタポによって搜索、尋問を受けるが、この事件が彼の健康に決定的な影響を及ぼしたと見られ、それから数ヵ月後、1938年6月に48歳で他界した。

それでは、ユーラシア主義者としてのトゥルベツコイの世界観、その起源はどこに見出せるだろうか。先に述べたように、ユーラシア主義の運動としての出発点は1921年である。しかし、トゥルベツコイにとってその起点となるヨーロッパ批判は、本人が言うところでは、1910年前後に確立されていたようである⁵⁰⁾。そうすると、彼の世界観が培われた過程を考察する上で、まずは亡命前のトゥルベツコイがどのような背景のもとで、後のユーラシア主義につながる問題意識を持つようになったのかを考える必要があるだろう。

まず一つには、19世紀以来の知的潮流に対する彼の反発があったと思われる。19世紀のロシアにおける思想、文化は、西欧主義とスラヴ主義の論争から生まれたといわれる。そこでは基本的に、西欧から入ってきた思想の流れが論争の歴史と並行して対置されるのが通例であろう。ナポレオン戦争以来のフランスからの思想流入は西欧主義の軸として、そして1830年代以降のドイツ観念論哲学の流入は、スラヴ主義へ強い影響を及ぼしたものとして説明される。トゥルベツコイが「西欧」の同義語として「ロマンス・ゲルマン」という言葉を使うのには、ロシアにとって長らく「西欧」がフランスとドイツを意味したという背景がある。しかし彼にとっては、フランスの思想が伝えるところの「普遍主義」にも、ドイツのいわゆる「民族の哲学」が主張するような「個別の」民族が持つ価値にも、結局のところは自分たちこそが「選ばれた民」であり、最も優れていると思う意識が感じられたのではないだろうか。彼は後に、ヨーロッパの「自己中心主義」批判を展開するわけだが、その出発点の一つには、こうした思想潮流に対する批判的観点があったかと思われる。また、「西欧化」を望むあまり自ら精神的隷属化を進めたという彼のロシア観もここで形成されたものと推測される。このことは、ロシアの19世紀的なヨーロッパ観に縛られていないという意味では、リャザノフスキーが強調するように、彼が「ロシア・ルネサンス」の中で育った世代であるということにも関係するかも知れない⁵¹⁾。

より実態的な部分では、ヨーロッパによる植民地支配についての関心と見聞があったことが、『ヨーロッパと人類』における叙述や、彼が書いたものからも見て取れる。例えば、1921年の書簡の中には、「ロマンス・ゲルマンの支配層がしてきたこと、すなわち、工場と『有色人種』の雇われ人たちを支配し、『黒人』や『黄色人種』を抑圧し、彼らにヨーロッパ人のように振舞わせ、ヨーロッパの製品を売り、ヨーロッパに資源を供給すること」⁵²⁾という

49 *Letters and Notes*, p.306.

50 Nikolai S. Trubetskoi, *Evropa i Chelovechestvo* (Sofia: Rossiisko-Bolgarskoe Knigoizdatel'stvo, 1920), Reprinted in *Nasledie*, pp.29-30; *Letters and Notes*, p.12.

51 Riazanovsky, "Prince N.S.Trubetskoy's 'Europe and Mankind,'" p.220.

52 *Letters and Notes*, pp.15-16.

ような記述がある。素朴な描写ながらも、彼がこの問題に一定の知見を持っていたこと、ヨーロッパによる植民地支配に批判的であったことがわかる。

そして、ヨーロッパ文化こそが最も優れているとする思考様式に対し、彼が異議を唱えるようになったもう一つの要因は、カフカス地域の文化研究にあったと考えられる。後に彼のライフワークとなるこの地域の言語、文化研究を通じて、トゥルベツコイは、ロシア文化が擁する「アジア的」な要素こそが、ロシア文化をヨーロッパ文化と本質的に分けるものであることを認めただけでなく、それを改めて評価する視点を得たのである。現に彼は、この地域の言語を言語学者としても高く評価している。その中で、ロシア人の文化とカフカス地域にある種々の文化のどちらが優れているかなど判断はできない、「あらゆる民族と文化は、いずれも全て等しい価値を持ち、高いものも低いものもない」⁽⁵³⁾という彼の文化観が確立されたのである。また、リャザノフスキーが指摘したように、バルトリドに代表されるような当時の東方研究の進歩と成果も、こうした見解に影響を与えた一要因に加えられるかも知れない⁽⁵⁴⁾。また、彼が後に最も重視することになるユーラシアの民族的、文化的多様性に対する認識もここに由来している。様々な民族が混沌とした様相を呈しながらも、調和し、共生している「ユーラシア」イメージの原風景は、彼が見たカフカスにあったといえよう⁽⁵⁵⁾。トゥルベツコイは、多民族がそれぞれの特徴を保ちながら共生するという地域の特性こそを、ヨーロッパ化という均質化から守らなくてはならないと考えたのである。

以上のような諸要因が、亡命以前の彼の世界観を形成し、ヨーロッパの「自己中心主義」批判を導き出す背景として存在したとするならば、それでは、これがユーラシア主義へと変わったのはいつ頃のことか、何が原因となったのか。この間の彼個人の経験と、彼を取り巻く状況の変化から、それを探ってみたい。

第一に、革命と亡命の経験が挙げられることは明らかである。ユーラシア主義を提唱するに至った時期は、彼が受容れ社会の中であって、異なる価値体系と向き合い、自身の自己認識と、「ロシアとは何か」を改めて考察したであろう時期と一致する。また、革命によって国家から疎外され、受容れ社会においても「祖国を失った」存在となった経験は、「国家」としてのロシアを問い直す内在的契機となり、さらに、先に言及した多民族の共生についての考えとも相まって、戦間期の中・東欧で力をもった「言語ナショナリズム」や「一民族一国家」のイデオロギーに対する問題意識を喚起することにもつながった。

そしてやはり、「革命をどう考えるか」という大命題がなければ、ユーラシア主義は生まれなかったであろう。首都で革命が起こってから、赤軍の勝利が確実なものとなり、ロシア国内に留まれなくなってブルガリアへと渡るまでのおよそ3年間、彼はカフカス地域を転々として過ごした。その時の経験を綴った書簡の中には、例えば、1918年3月末のバクー事件に遭遇したことが記されている。「カフカスを彷徨っている間、私は1918年3月にバクー

53 *Letters and Notes*, p.13.

54 Riazanovsky, "The Emergence of Eurasianism," p.64.

55 沼野氏によれば、このようなカフカス地域の多民族状態とそこでの経験を、アブハジア出身の作家、フェジリ・イスカデル氏は次のような言葉で表している。「私は子供の頃からスフミに住んでいたのですが、これは多民族的な町で、その共通語はロシア語でした。私は様々な言語、様々な響きのシンフォニーを、魂の祝祭のように受け止めたものです。それはとても楽しいことだった。」トゥルベツコイが想起していたのも、カフカスのこのようなあり方ではなかったのだろうか。沼野充義『徹夜の塊：亡命文学論』作品社、2002年、263-264頁。

に着いた。ちょうど『ソヴェト権力に対するムスリムの蜂起』、より正確に言うと、アルメニア人がタタール人を虐殺している時だった。』⁵⁶ アゼルバイジャン人の民族部隊がバクー・ソヴェトに対して蜂起し、戦闘により3000人以上の死亡者を出したこと、その際、ソヴェト側についてアルメニア人が多くのムスリムを虐殺したことで知られるこの事件を一つの例として、おそらくトゥルベツコイはその3年間で、革命がカフカス社会に招いた混乱と、それに対して強硬に進められていくソヴェト化の様子を、身近に見聞きしていたはずである。このような経験は、ヨーロッパからの借り物である共産主義思想がそこにはそぐわないこと⁵⁷、それが混乱を招いているだけであることを彼に確信させ、共産主義を強制するポリシェビキへの批判を強めることにつながった。

ヨーロッパを真似て、ロシアの本質にそぐわない共産主義という思想を移植した結果が「悲劇」を招いたとする批判から、それならば何が本当にロシアにふさわしいのか、という問いが生まれるのは自然であった。そこからより具体的にロシアの将来像を示し、ポリシェビキによって破壊されたロシアの「再建プログラム」を作成しようという意図が、ユーラシア主義へと繋がっていったのである。

このような個人的契機に加えて、トゥルベツコイが身を置いていた当時のヨーロッパの社会状況に注意を払わなくてはならない。第一次世界大戦後のヨーロッパは、戦争の惨害と、疲弊した経済に苦しみ、各国内では労働者階級の不満が高まっていた。社会主義思想が一定の支持層を得る一方で、民意の反映という意味では既に限界をみていた西欧民主主義への挑戦としてファシズムが登場した。その波は彼がいたウィーンにも波及していた。植民地諸地域ではヨーロッパ支配に対する反発と独立の気運が高まっており、その最中に起こったロシア革命がヨーロッパの危機感をいかに煽ったかは想像に難くない。それは、それまで「世界の中心」だったヨーロッパの地位と、帝国による支配と既存の秩序に、明らかな変化と衰退の兆しが見え始めていた時期なのである。そのような危機感を代弁するかのようになり、ヨーロッパの「没落」を予言する文明論が大きな反響を呼んでいた⁵⁸。その中でユーラシア主義は、ヨーロッパに替わる次なる文明としてユーラシア世界を押し出すという意味をも負ったのである。

ウィーン時代は彼にとって、言語学者としての地位を固める過程であり、亡命先の社会で生活し、徐々に溶け込んでいく過程でもあった。彼が亡命直後のブルガリアで生活の地歩を固める意図がなかったのに対して、ウィーン大学での日々は彼にとって、それとはまったく

56 *Letters and Notes*, p.4.

57 「[社会主義建設の]計画は、ロシアの地とは何のつながりもない、ヨーロッパから借用してきたものである。…政府は、ロシアという材料から社会主義国を作ろうとしているが、これは既に長い間、ヨーロッパの社会主義者たちが夢みてきたことなのである。」 Nikolai S. Trubetskoi, *Nasledie Chingizkhana: Vzglia na Russkuiu Istoriuu ne s Zapada a s Vostoka* (Berlin: Evraziiskoe Knigoizdatel'stvo, 1925), Reprinted in *Nasledie*, p.277; 「社会主義も共産主義も、ロマンス・ゲルマン文明の産物である。それは、全ロマンス・ゲルマンの国に存在する社会、経済、政治、技術的条件を前提としている。」 Nikolai S. Trubetskoi, “Russkaia Problema,” *Na Putiakh* 2 (1922), Reprinted in *Nasledie*, p.333; 「共産主義者は『アジア的』な顔の上に、人工的で馴染まないマルクス主義の赤いマスクを着けようと無駄な努力をしている。」 Nikolai S. Trubetskoi, “Predislovie k Knige G. Uellsa ‘Rossiia vo Mgle,’” in G.D.Uells, *Rossiia vo Mgle* (Sofia: Rossiisko-Bolgarskoe Knigoizdatel'stvo, 1921), Reprinted in *Nasledie*, p.552.

58 リーベルマンは、トゥルベツコイがシュペングラーに興味を持っていたという事実を、リュクスのドイツ語の論文から引用している。 Liberman, “N.S.Trubetzkoj and His Works,” p.343.

異なる意味を持っていた。また仮にその自己認識において、亡命者があくまで「亡命者」のままであったとしても、スラヴ系の国であるブルガリアと、彼の批判するロマンス・ゲルマンであるドイツ人がスラヴ系諸民族を支配するという旧ハプスブルク帝国の社会構造を残す国では、受容れ社会の様子も、彼自身の経験も違った筈である⁽⁵⁹⁾。言語学者としての評価を得て、社会的な地位を手に入れ、彼自身がドイツ語を話し、オーストリアの情勢に興味を持つようになる一方で、実際に目の当たりにしたヨーロッパの社会における「スラヴ」「ロシア」の持つイメージは、彼に、ロマンス・ゲルマンの「自己中心主義」というその主張の正しさを確信させる効果を及ぼした⁽⁶⁰⁾。そして、「赤いウィーン」と呼ばれた都市での労働運動の興隆、護国団による右翼の運動の高まりといった社会状況や、ドルフス内閣の政策に象徴的な、ドイツのナチズムとイタリアのファシズムの間での板挟み状態だったオーストリアの情勢は、後述するように、彼の政治論にも影響を与えた。

トゥルベツコイのユーラシア主義は、モスクワ時代にカフカスの文化研究から芽生え、ロシア革命と亡命経験を内在的契機として育ち、戦間期の世界的変動を感じるヨーロッパにおいて培われたのである。

3. 近代「国民国家」批判としての文化論

ユーラシア主義の出発点は1921年であるといわれるが、しかし、1920年に出版されたトゥルベツコイの『ヨーロッパと人類』⁽⁶¹⁾がユーラシア主義の「先駆け」だったと評されることは多い。また、運動の創始者であるサヴィツキーとトゥルベツコイの出会い、このトゥルベツコイの著作を通じてであったともいわれる。ユーラシア主義の運動は、この著作にみられるような西欧文明批判を起点にして、そこから「ロシア世界」の自己認識の確立を目指したものと見えるだろう。

『ヨーロッパと人類』は、トゥルベツコイの議論における西欧文明批判の雛型を提示している。その内容を以下に要約してみよう。

ヨーロッパの人々が民族や国家の問題についてとる立場は様々であるが、いずれの立場も、ショービニズムとコスモポリタニズムという二つの極の間にあるものである。彼らは、ショービニズムとコスモポリタニズムは正反対のものだと思っている。しかし実際は、この二つの間に根本的な違いはない。これは同じ現象の、二つの段階、二つの側面に過ぎないのである。ショービニズムが前提とするのは、自分の民族が世界で一番優れているというアブ

59 この点に関してあまり確たることは明言されないが、例えばロシア人亡命者が得られる就職の機会に関して、以下のような言及がみられる。「亡命者は、パリでは流行の店か夜間営業の居酒屋を、ミュンヘンではビヤホールを開くしかない。ロシア人のスラヴ研究者も同じ原理で、スラヴ系の国で最もチャンスに恵まれる。他の国で職に就けたロシア人はいない。…私が仕事に就けたのは、スラヴ研究者としてではなく、主に公爵としてであって、それがちょうどウィーンだったからだ。」*Letters and Notes*, p.293.

60 例えば、パリでの学会の様子を記した中で、「フランスのスラヴ研究者は、スラヴ的、中央ヨーロッパ的、ロシア的なものは全て野蛮なものとなして、心の底で軽蔑している」と述べている。*Letters and Notes*, p.301. また彼は、「古代ロシア文化への先入観にある敵意や軽蔑を廃する」目的でフォルマリズム的手法を用いて文学評論を執筆した。Nikolai S. Trubetskoi, “Khozhenie za Tri Moria” Afanasiia Nikitina kak Literaturnyi Pamiatnik,” *Versty 1* (1926), Reprinted in *Russkii Uzel Evraziistva*, pp.267-299.

61 Trubetskoi, *Evropa i Chelovechestvo*, in *Nasledie*, pp.29-90.

リオリな信条であるが、コスモポリタニズムは民族間の区別を否定し、「文明化された人類」はたった一つの文化を有した単一の統一体であるべきだと考える。この点において、二つは明らかに異なるものにみえる。しかし、ヨーロッパのコスモポリタンがいう「普遍的人类文明」が意味するものとは、ロマンス・ゲルマンによって創られ、摂取された文化のことである。最も優れたこの文化が他のあらゆる文化に成り代わるべきだと考える点で、コスモポリタニズムとショービニズムに違いはない。自国民の中にある諸民族集団の個々の特徴を無視することや、自分たちに同化した外国人を「自分のもの」と考える点においても、両者は似ている。しかし、ヨーロッパ文化は全人類の文化などではない。

ショービニストとコスモポリタンが共有している心理的基礎は、「自己中心主義」と呼べるであろう。彼らは、自分に近い者程好ましいと考え、自分の属している集団をもっとも完璧なものとする。 「野蛮人」と呼ばれる人々と自分たちが対等であると考え、ヨーロッパ人はいないのである。ロマンス・ゲルマン人たちは、自分たちだけが「人類」であるとあまりにもナイーブに信じていたがために、自分たちのショービニズムを「コスモポリタニズム」と呼んできたのである。

「進化の尺度」や「発展段階」という概念は、「自己中心主義」的なものである。その根底には、人類の発展は一本の直線に沿って進んでいるという考えがある。その上には先にいる者も後れた者もいる。そしてロマンス・ゲルマン人、あるいはその文化を摂取した民族がその頂点、人類の到達点の最高峰にいるものとみなされている。しかし、この考えは説得力のある証明を欠いている。進歩の直線の始めと終わりを科学的、客観的に知ることはできないし、ロマンス・ゲルマンの文化が他のあらゆる文化よりも進んでいると証明することはできない。必要な発想は、進歩の「梯子」よりもむしろ「水平面」である。世界中の文化や民族には等しい価値がある。他より高い者もいなければ、低い者もない。

(ガブリエル・タルドの理論が示すように) ある一民族が、他の民族によって創られた文化へと完全に同化することは不可能である。文化の発展の仕方は、それを創造した民族と、受容れた民族とは異なり、その相違によってますます複雑化するものである。また、文化の同化と混合を同一視してはならない。文化においては、混合のみが可能なのである。しかし、不可能であるにも拘わらず、多くの民族がそのような同化を目指して努力している。ヨーロッパ化した、あるいはそれを志向する民族はロマンス・ゲルマン的心理に染まり、しかしその「自己中心主義」に気付いていないため、全てをロマンス・ゲルマン的見地から評価するようになってしまう。ヨーロッパ化した民族は、自らをロマンス・ゲルマンと比較しながら、よりヨーロッパに近いという点で後者の優越を意識する。それは次第に、民族の自尊心の喪失へとつながっていく。ヨーロッパ文化に矛盾するものは全て悪であり、後進性の印であり、ヨーロッパから借用したものは全て進歩であり、ヨーロッパの規範からはずれることは反動とみなされるようになる。また、ヨーロッパ化の最も重大な結果は、民族的団結が崩されることであり、人々がばらばらに分離してしまうことである。殆どの場合、ヨーロッパ化はトップ・ダウンで行われる。このことが、階級間の相違を、ひいては階級闘争を尖鋭化する。ヨーロッパ文化の摂取と混合は、世代によって異なる度合いと早さで行われるため、このことが世代間にも断絶をもたらす。これが文化創造における民族全体の協働を妨げ、不可避的に彼らを弱体化し、ロマンス・ゲルマンに対して不利な立場におくことにつな

がるのである。社会生活と文化的発展における困難の結果、彼らの創造性は落ち、そのような民族はロマンス・ゲルマンの目には常に後進的と映る。そしてそれがさらに、彼らの自己評価を低めてしまう。こうして、ヨーロッパ化された民族は自尊心を失い、団結感を維持することができず、「進歩」に追いつくために疲弊し、強烈な愛国心と民族的自信を持つ人々の前に屈してしまうのである。

こうした諸民族が、全力でもってヨーロッパ化と戦わなくてはならないのは明白であるのに、抵抗するにしましめないにしても、ヨーロッパ化は不可避であるように思える。ヨーロッパ人は、非ロマンス・ゲルマン人に出会う際に、彼らの物資と銃器を持ってくる。もしその民族が抵抗を見せなかったらこれを征服し、植民地にし、ヨーロッパ化を強制する。もし抵抗を試みたとしても、そのために彼らはヨーロッパの銃器と最新の科学技術を獲得しなければならない。ヨーロッパ的社会政治秩序に基づいて工場を作り、ヨーロッパの科学を学び、そうする過程でヨーロッパ化がおのずと進んでしまうのである。

これらをもたらずヨーロッパの軍国主義も資本主義も、永遠のものではない。ヨーロッパの社会主義者が予言するように、いつかは無くなるものであろう。ヨーロッパ化に反対する者は、ヨーロッパにおける社会主義秩序の建設を望むべきだということになる。しかし、ここにも矛盾がある。社会主義者は、他のどのヨーロッパ人よりも、インターナショナリズムと軍事的コスモポリタニズムに依存しているのである。もしもヨーロッパで社会主義秩序が形成されたなら、彼らはそれを武力であらゆる場所に押しつけ、反乱に対して警戒するようになるだろう。社会主義を守るべく、彼らは軍事技術も資本主義も消滅させたりはしない。資本主義者であろうと社会主義者であろうと、ヨーロッパ化の不可避性は、ロマンス・ゲルマンの文明に浸透した「自己中心主義」ゆえに残存する。

では、いかにしてこのヨーロッパ化と闘うべきか。ロマンス・ゲルマンのくびきの下で苦しんでいる人々が、民族の違いに関係なく団結して抵抗すればその試みは成功するだろう。ヨーロッパ化した非ロマンス・ゲルマン民族は、ヨーロッパ文化を受容れる際に、その「自己中心主義」を取り除くことはできる。もし彼らがロマンス・ゲルマンの文化を絶対的で完璧なものともみず偏見から解放されれば、自分自身の文化を蔑視したり、破壊する理由もなくなる。この役割は、従来先頭にたってヨーロッパ化を進めてきた知識人によって果たされるべきである。彼らの意識変革は、この世界規模のヨーロッパ化に終止符を打つことができるはずである。この難事業において、知識人たちは協力と合意の精神に基づいて協働しなくてはならない。真の対立は一つだけ、ロマンス・ゲルマンとその他全ての人々、「ヨーロッパと人類」だけなのである。

こうした西欧文明批判を軸として、トゥルベツコイのナショナリズム論、文化論は展開されていく。ここではまず彼が、多様性の破壊者としてヨーロッパを位置付け、自己認識とナショナリズムの問題を論じた筋道を概観する。それら全体を通じて、トゥルベツコイの文化論の基本的な部分が明らかになるであろう。

彼の西欧文明観は、「自己中心主義」に立って他民族に単一の価値観を押し付ける存在であると同時に、民族文化の「多様性の破壊者」として展開される。トゥルベツコイにとって民族文化とは本来、然るべき自己認識に基づき、その民族の生活形態や共同体の社会機能と有機的に結びつき、構成員である個々人の差異や特性を反映したものであった。そして、あ

らゆる民族文化には等しい価値があり、その多様性こそが重要である、というのがトゥルベツコイの強調するところである。しかしヨーロッパは、「自然の法則」である民族文化の多様性の「罪深い」破壊者なのである。パベルの塔のエピソードを手がかりに彼は、聖書に描かれる「言語の混乱」は言語と文化の多様性の創造を指すと解釈する。それは人類が逆らえない自然の法則であり、どんなになくそうと試みても存在するものである。民族文化の多様性を破壊し、単一の文化を創造しようとすることは罪深い。西欧文明の主たる罪は、民族の違いを廃し、あらゆる場所で単一のモーレス（道徳、倫理）、社会・政治構造、概念を導入しようとしていることで、これが個人の精神的基礎を破壊するのであると彼はいう⁶²⁾。

ところで、民族文化が依拠するその自己認識が歪んだものであった場合、そこには「偽のナショナリズム」が生まれる。そして、非ロマンス・ゲルマン人がヨーロッパ化の悲劇的結果を避けるためには真の自己認識が必要だと、トゥルベツコイは論を進める。ソクラテス以来の普遍的な教えでもある「己を知る」ことは、自分という人間とその位置付けについて、自分が世界の中心などではないことを教えてくれる上、自分の周囲についても知らしめてくれるので、結果としてそれが自らの独自性の認識、自己規定へとつながるものである。こうしたことは、個人に限らず集团的自己認識にもあてはまる。そして、自己認識を追究する中で、個人や民族の表現の場として民族文化やナショナリズムがあるのだという。

彼は、ナショナリズムにはあらゆる種類があるが、「真のナショナリズム」とは、自己認識に基づいた独自の民族文化に起源を持ち、ナショナリストはその文化を守るために闘うものであり、その行動はそうした文化の理念に導かれるべきであると考え⁶³⁾。この尺度を現存のナショナリズムにあてると、大半が「偽のナショナリズム」であることがわかったとして、いくつかの「誤ったナショナリズム」の型を以下のように示す。

まず、最も多いのは、文化の唯一無二の価値を重要と考えないナショナリズムで、それが目指すのはただ政治的独立のみである。彼らは、「大民族」や「強国」に対等と認められる「国家（を持つ）民族」の一員になりたいだけである。このタイプは非ロマンス・ゲルマンの「小さな」民族に多い。彼らは「自分らしく」あることよりも他人になることを望んでいるのだから、そこでは自己認識は何の役割も果たしていない。ヨーロッパ化、つまりあらゆる分野でロマンス・ゲルマン的なものを再生産することは、民族の唯一性を完全に失う結果になる。自分の文化を犠牲にしている彼らが好んで使う「民族自決」の用語は、かえって混乱を招くだけである。このような姿勢には「民族」も「自決」もない。

もう一つの偽のナショナリズムは、戦闘的ショービニズムである。これは、自国内にいる「他民族」それぞれが持つ民族的唯一性を破壊し、自分たちのそれを行き渡らせようとする試みである。このようなショービニズムは、傲慢さと、あらゆる民族の持つ等しい価値を否定するものである。

偽のナショナリズムの特殊な例は、文化的保守主義、すなわち、特定の文化的遺産に絶対的な価値を人工的に結び付け、変化を否定することである。こうした「偽のナショナリス

62 Nikolai S.Trubetskoi, "Vavilonskaia Bashnia i Smeshenie Iazykov," *Evraziiskii Vremennik* 3 (1923), Reprinted in *Nasledie*, pp.367-381.

63 Nikolai S. Trubetskoi, "Ob Istinnom i Lozhnom Natsionalizme," in *Iskhod k Vostoku: Predchuvstviia i Sversheniia, Utverzhenie Evraziitsev* (Sofia: Rossiisko-Bolgarskoe Knigoizdatel'stvo, 1921), pp.71-85.

ム」はどれも有機的に得られた正しい自己認識に基づいていないのが共通の特徴である。

このような「偽のナショナリズム」に対して、トゥルベツコイの描く「真のナショナリズム」像は、自己認識を持つがゆえの謙虚さと自信に満ち、寛容で、傲慢さや野望、排他性を持たない。論文の最後に、彼は翻ってロシアのナショナリズムをこう論じる。ピョートル大帝以降のロシアに真のナショナリズムは全く存在しない。教育を受けたロシア人は「真のヨーロッパ」になることを夢み、しかし叶わないとなると多くが「後れた祖国」を見下した。自称ナショナリストたちは、ナショナリズムを強国になるための、軍事力や経済力を得るための、あるいは輝かしい国際的地位を得るための推進力として理解していた。

このような主張の上に立ったとき、ロシアにとっての自己認識の問題は、トゥルベツコイにとってとりわけ重要なテーマとなった。「ロシアらしさ」とは何なのか。ヨーロッパ化から抜け出した時、そこにあるべき姿とはどのようなものか。その問題提起に、彼は民族的、文化論的観点から、そしてロシア史の問題を通じて答えようとする。

まずは、『東方への旅立ち』に収められている「ロシア文化の上層と下層:ロシア文化の民族的基礎」⁶⁴)にそれを見てみよう。彼によれば、文化には必ず、大衆的で素朴、民俗的な「下層」と、社会の支配層、教育を受けた層が担う「上層」があり、この二つの層の間には調和と相互交流がある。しかしロシア文化には、ピョートル大帝以降のヨーロッパ化でこの二つの層に不和が生じている。簡潔に言えば、「上層」におけるロマンス・ゲルマン文化の表面的な影響と、「下層」における正教の伝統の根深い浸透の間に乖離が生じているというものである。失われた調和を取り戻すためにも、ロシア文化はロシアの土に根ざしたものであるべきであるということを基軸に、彼はこの「下層」におけるロシア文化の基礎的な特徴を追究する。

まず、「民族的視点から見ると、ロシアの民族文化は一つの大きな総体である。」ロシアは独自の文化圏を形成しており、その中にロシア人⁶⁵)のほかにウゴル・フィン語系、チュルク語系の人々を含んでいる。東と南東ではアジア文化とのつながりを持つステップのチュルク・モンゴル系の文化と混じり合い、西にはロマンス・ゲルマンや「バルカン文化」との境界にある西スラヴの文化へと徐々に移行していく様が見られる。そして言語や民俗文化など多くの点において、ロシア文化は東方との強いつながりを持っている。民族的にも、ロシア人は必ずしも純粋にスラヴではないのである。ロシア人と、ウゴル・フィン語系と、ヴォルガ河畔のトルコ系が、スラヴ系と「トゥーラン人⁶⁶)の東方」とが等しく重要なつながりを有する文化圏を形成しているのである。そして、この特徴をよく認識した上で、歴史的につ

64 Nikolai S.Trubetskoi, "Verkhi i Nizy Russkoi Kul'tury: Etnicheskaia Osnova Russkoi Kul'tury," in *Iskhod k Vostoku*, pp.86-103.

65 「ロシア」「ロシア人」をめぐるトゥルベツコイの言葉の用法について注記しておきたい。いわゆる「ロシア人」(russkii)は「ロシア民族」(russkii narod)とほぼ同義で使われている。ただし、ウクライナ等との差異化を意識的に行う時には、「大ロシア人」(velikorusskii)を用いることもある。民族的所属は何であれ、ロシアの領域内、「ロシア世界」に住む人々の総体を指す時には「住人」(naselenie)を使うことが多い。

66 議論の余地は残ることを認めながら、彼は「トゥーラン民族」をウラル・アルタイ語族として定義する。具体的には、ウゴル・フィン、サモエド、チュルク、モンゴル、マンジュリーのことを指す。Nikolai S.Trubetskoi, "O Turanskome Elemente v Russkoi Kul'ture," in *K Probleme Russkogo Samopoznaniia* (Paris: Evraziiskoe Knigoizdatel'stvo, 1927), Reprinted in *Nasledie*, pp.137-138.

ながりの強い諸民族を一つの文化的総体としてまとめられるような特徴を広げるべきであるが、ただしこれは決してその差異をなくすことではない、という。

このように複雑で、種々の民族的諸要素を内包する「ロシア世界」には、スラヴ的要素とトゥーラン的要素が共存しているということを、彼は別の論文で主に言語的分析によって論じた⁽⁶⁷⁾。

また、1927年に書かれた論文では、スラヴ系の中にも存在する文化的差異に注目している。「『ロシア民族一般』というのは抽象である。具体的には、それ自体多種多様な大ロシア人（北の大ロシア人、南の大ロシア人、ポモール（Pomor）、ヴォルガ・ロシア人、シベリア人、コサックなど）、ベラルーシ人、これも多様な小ロシア人ことウクライナ人がおり、それぞれの地域での文化の『下層』は、個々の多様性に適合するものであるべきである。そのため、未来のロシア文化は、地域的、領域的線に沿って多様化していなくてはならない。過去の、抽象的でお仕着せの、顔のない同質性の代わりに、地域の色相の虹が現れるべきなのである。」⁽⁶⁸⁾

このように異質な要素が混じり合いながらも並存するロシア文化の特徴を説くトゥルベツコイの文化論は、繰り返し述べるように、それまでのロシア知識人の世界観とは根本的な違いを擁している。「トゥーラン人の東方」とのつながりをロシアの一部として肯定的に捉え直したこと、そうした多様性と調和、総てを内包するおおらかさこそがロシア文化の核であると考えた点が、トゥルベツコイのユーラシア主義の本質になっていたのである。確かに彼は、ヨーロッパ化以来調和を失ったロシア文化を建て直すための中心的役割を担うのは「ロシア人」であり、正教であると想定してはいるが、それは、ロシアはスラヴ系の国であるという前提に立ち、スラヴ系のみを連帯と使命を強調する汎スラヴ主義や、一部のスラヴ主義とは、明らかに一線を画すのである。

また、文明論との関係では、西欧文明を相対化し、それぞれの民族文化に等しい価値を付与するという点では、ダニレフスキーやシュペングラーを始めとする文明論と立場を共有するものの、「ユーラシア」としてのロシア文化が持つ多様性という視点は、文明論者のいう「文化の類型」や「比較形態」が前提とする、一つの文化の中の均質性とは異なるものである。

次に、彼がこのようなユーラシア観を、ロシア史の問題においてはどのように論じていたかを概観したい。トゥルベツコイの文化論の中で、なぜロシア史の問題が重要な位置を占めるかという点、それが単に、「民族的多様性がロシア文化の特徴である」という主張に留まらない視座を提示しているからである。ロシア史の中のどこで、ロシア文化がその特性を生かし、理想的な状態で存在したか。そしてどこで、文化の「上層」と「下層」の調和が破壊され、多様性は画一化の危機に晒されたのか。この問題に彼の文化論は、先の西欧文明批判の枠をも越える、西欧的近代「国民国家」形成への批判ともいえるべき視点を提示しているのである。

67 Nikolai S. Trubetskoi, "O Turanskom Elemente v Russkoi Kul'ture"; "Obshchieslavianskii Element v Russkoi Kul'ture," in *K Probleme Russkogo Samopoznaniia*, Reprinted in *Nasledie*, pp.93-219.

68 Nikolai S. Trubetskoi, "K Ukrainskoi Probleme," *Evraziiskii Vremennik* 5 (1927), Reprinted in *Nasledie*, p.429.

1925年に出版された『チンギス・ハンの遺産』⁽⁶⁹⁾は、ロシア史研究における「ユーラシア学派」の創始の書として、ヴェルナツキーの一連の研究と並び言及されることが多い。この著書は、ロシア国家の起源が、教科書で説明されるようにキエフ・ルーシにあるのではなく、むしろモンゴル支配から強い影響を受けて成立したものだという主張を展開する前半、そしてその本来の姿を無理なヨーロッパ化によって歪めてしまったピョートル大帝の改革を批判し、その不可避な結果として起こった革命と、それによって生まれた共産主義政府の危険性と可能性を検討する後半から成っている。

前半の中で重要なのは、彼がほとんどの著作において行わなかった地理的概念としての「ユーラシア」の定義に触れていることであろう。彼は「モンゴル帝国の核としてのロシアの地理的領域」の特徴を、「森林のない平野と台地の、長く途切れることのない帯が、太平洋からドナウ河の河口まで延びている。この帯を、ステップシステムと呼ぶことができる。ステップシステムは、北からは広い森の帯によって取り巻かれており、その後ろにはツンドラの帯が続く。南からは山脈に取り囲まれている。このように、西から東へと伸びる4つの平行な帯、すなわち、ツンドラ、森林、ステップ、山がある。子午線方向、つまり北から南へ、あるいは南から北へ、この4つの帯の全システムは大きな河川のシステムと交差する…外的輪郭としては、開かれた海への出口を欠いていること、海岸線がないことに特徴づけられる」⁽⁷⁰⁾と描写する。その気候は、「大陸性気候」と呼ばれるもので、冬と夏の間の急激な気温差に特徴付けられるということ、そしてこれら全てが「この地域をヨーロッパの特徴からもアジアの特徴からも切り離し、それを独特の大陸、世界の中でも独自の一部分として考えることを可能にしている」⁽⁷¹⁾と結論する。

この地理的、文化人類学的総体を政治的に統一することは「歴史的必然」であり、南北の交通路である河川システムだけでなく、東西を結ぶ唯一の路であるステップシステムを支配することによってユーラシアの主人となり、ユーラシア全体を一つの国家にまとめるという歴史的課題を果たしたのがチンギス・ハンであった、とトゥルベツコイは考えるのである。「歴史的に統一される運命」であるとするその根拠が希薄な印象を与えはするが、既存のロシア史研究に対して地理的要因を重視するという「ユーラシア学派」の特徴の一つを、如実に表している部分であるともいえる。

トゥルベツコイによれば、ロシアにとってモンゴル支配の時代の特徴は、際立って熱心な宗教生活の発展だったという。「タタールのくびき」は過去の罪に対する神の罰と考えられ、個人が祈りを通じて償いと浄化を行おうとしたことが、宗教芸術の発展を促した。また、モンゴルによるルーシの公国の破壊と併合は、ロシアの民の心に怒りと恥辱を与えた。これにより、プリーナなどを通じてロシアの過去を理想化する動きが生じ、古代ロシアを美化することとそれに伴うヒロイズムは、モンゴル支配に反発しようとする民族的誇りを強め、それが宗教的要因と相まって、民族文化の発展における力強い要因となったのである。ロシアにおける新しい「民族タイプ」の形成は、道徳的あるいは精神的にモンゴルに多くの起源をもつ側面を残しつつ、それらの精神的要素が正教の政治思想や伝統と組み合わせられることで

69 Trubetskoi, *Nasledie Chingiskhana*, in *Nasledie*, pp.223-327.

70 Ibid., p.226.

71 Ibid.

行われた。モスクワを内なる再生の中心として、そこでは民衆生活と信仰と国家イデオロギーが融合していった。ツァーリは神と民の仲立ち役であり、神の命令を民の生活に適用する道具であると信じられるようになった。チングス・ハンの死後、モンゴルが弱体化してゆく中で、モスクワに統治されたロシアの地域だけが、国家統一体としての意識を残していた。モスクワ公国は、モンゴルには欠如していた宗教的世界観と国家イデオロギーの強い結びつきと、文化的自己充足とをその強さにして、モンゴル帝国の後継者となったのである。そこでは精神的なあり方が重要視されていたので、例えば「異郷（の人）」とは民族的概念ではなく、より宗教的な意味をもっていた。しかし、一定の宗教的寛容も行われており、非ロシア人をロシア化して公国に組み込もうとするような努力もなされなかった。なぜなら、この時モスクワ公国に存在した意識こそ、トゥルベツコイのいうところの「真のナショナリズム」だったからである。

後半では、そもそもはヨーロッパからの侵略の脅威に対抗するための措置であったピョートル大帝の近代化政策が、いかにこのロシアの精神的、文化的基礎を破壊したかが論じられている。トゥルベツコイによれば、ヨーロッパの軍事技術の導入とその強国化は、ロシアのヨーロッパへの文化的、精神的隷属化という代償を支払って行われた。ロシアがヨーロッパの強国になることと引き換えに、統治階級の宗教的生活様式は消滅し、コスモポリタンの非宗教的な生活様式に取って替わられた。ヨーロッパ化は社会の上から下へと進み、結果として、このことは社会階層間、世代間に不和をもたらした。また、ヨーロッパの強国を真似て教会を政府に従属させることで、その精神を殺していった。こうして異質な文明がロシアに移植され、その民族的基礎は失われたのである。

教育を受けた層は、自由主義や議会制民主主義、社会主義といった様々なヨーロッパの思想に同化していったが、みな一様にロシアの民衆には無関心であった。中でも特に、兵役、工場労働、教育などを通じて行われたヨーロッパ化は、社会の中の教育を受けた層と民衆の間に、「似非インテリゲンツィア」のグループを生み出した。彼らは古い生活様式を軽蔑し、統治層をも憎み、いくつかの素朴なヨーロッパの思想にごく初歩的な形で同化した。政府が自分たちに批判的な彼らを弾圧したことで、革命への道が用意されたのである。このような流れから、トゥルベツコイは共産主義の革命を、ピョートル大帝の改革以来のヨーロッパ化、強国化の延長線上にある当然の帰結として考えている。

多様な民族的要素の混在する文化と、ヨーロッパ崇拜によって歪められていない自己認識、宗教的世界観に根ざした精神的基礎と、それに支えられた「真のナショナリズム」、文化の担い手における「上層」と「下層」の調和という、彼の考えるロシア世界のあるべき本来の姿は、ピョートル大帝以前のモスクワ公国のあり方に求められているのである。そこに存在したといわれる、宗教、その教義にのっとった人々の日常生活、民衆の世界観と矛盾しない政治体制とのつながりが、トゥルベツコイが理想として想起するものだったのである。確かに、モスクワ公国を理想化し過ぎているという批判はあるだろう。しかしここには、彼の文化論を基礎にした、ヨーロッパ的「強国」化、さらには西歐的「国民国家」化に対する批判的観点が潜在していることを見落としてはならない。

出発点としての彼の西歐批判は、主にヨーロッパの対外行動に向けられていたが、同時に対内的にも「自国民の中にある諸民族集団の個々の特徴を無視して」きたという経緯にも着

目しており、双方向における「多様性の破壊者」として論じられた。非ヨーロッパ民族においては、自分の民族文化を軽視して「強国」に、「国民国家」の一員になりたいと望む「偽のナショナリズム」が批判される。この文脈でいわれる「国民国家」とは、近代ヨーロッパにおいて形成されたとされる「一民族一国家」の原則に立った国家のあり方、つまり、領域内の均質化、「自国民の中にある諸民族集団の個々の特徴を無視」することによって成立した国家を指すと考えられる。ここには、彼が執筆を進めていた第一次世界大戦後の中・東欧における政治、社会状況、すなわち、「一民族一国家」のイデオロギーに依拠した「偽のナショナリズム」も、本質的には「自己中心主義」である「インターナショナリズム」もそぐわなかった諸地域の現実を反映する側面がある。

彼は1927年に発表された論文の中で、当時の文化状況についてこう論じた。「国際連盟の余計者である『新しい国家』によって現在接ぎ木されている『文化』…そのような文化は、民俗的生活様式の深いところにある基礎を否定し、無計画に選んだ、大体において本質的でない生活の側面を煽動的に強調したものだ。最近の熱狂は…あさましく、卑しい田舎者ぶりと、文化的後れの見本である。」⁷²⁾

第一次世界大戦が終結すると、崩壊したハプスブルク帝国と、オスマン帝国、ロシア、ドイツ両帝国の解体の跡に、極めて複雑な民族構成をもつ地域が現れた。この多民族状態の地域では、民族の境界と国家の境界を一致させる原則は実情にそぐわない。しかしそれでも西歐的「国民国家」を成立させようとする新興独立国家の人為的な国境画定は、必然的に多くの領土をめぐる争いと、少数民族問題を招いた。その中で、この「国民国家」形成を目指す多くの新興国の支配層は、固有の「国民文化」に正統性を求め、イデオロギーとして利用しようとしたのである。また、このような動きに触発されて、ヨーロッパ各地で「分離主義的」運動も活発化していた。彼が「『民族自決』が招く混乱」として揶揄しているのは、このような政治、社会状況と、文化を政治目的に従属させようとする傾向であっただろう。

利益追求の意志を持った各国の干渉にも影響され、勢いを増していた「偽のナショナリズム」の嵐の一方で、現状への危機感や、第一次世界大戦の直接的原因ともなったといえるそのナショナリズムへの反省から、「国民国家」の超克を目指す理念も登場した。「バルカン連邦」や「ドナウ連邦」の構想、ブリアンやクーデンホーフ・カレルギー⁷³⁾の「欧州合衆国」案などがその例である。この点から考えると、トゥルベツコイの文化論は、第一次世界大戦後のヨーロッパにおける「国民国家」批判の動きと軌を一にするものである。

彼はまた、政治権力の意図による、人為的で不自然なナショナリズムの動員に批判的であった。人為性への批判という点に、モスクワ公国を美化するもう一つの理由がある。同じ「近代以前」にあっても、ヨーロッパでは政治権力が領土画定と「国民」となるべき人々の同質化を行っていたが、文化の「下層」の担い手である民衆の主体的参加はそこにはなかったといわれる。それに比べてモスクワ公国では、政治権力と民衆の間に目的意識の一致があり、主体的かつ自然発生的な「真のナショナリズム」が存在したのである。

72 Trubetskoi, "K Ukrainskoi Probleme," in *Nasledie*, p.427.

73 ヨーロッパ統合運動の先駆者といわれるオーストリアのクーデンホーフ・カレルギーの『汎ヨーロッパ』について、トゥルベツコイはその可能性を評価しつつも、そこに描かれる「ヨーロッパ」の地図がアフリカとアジアの植民地を含んでいることを指摘し、自分の求める理念は「植民地帝国主義とは相容れない」と批判している。Trubetskoi, "Ob Idee-pravitel' nitse Ideokraticeskogo Gosudarstva," in *Nasledie*, p.524.

これを、ロシアの地から離れたがゆえに膨らんだ、「失われた祖国」と「失われた過去」への亡命者の憧憬の念と断じるのはた易い。確かにそれも一面では事実であろう。しかしそれ以上に、第一次世界大戦後の状況を亡命先において目の当たりにしつつトゥルベツコイが展開した文化論には、ロシアという多民族地域の在り方を通じて近代「国民国家」を問い直す思想としての意味が見出される。そしてそれは、亡命者という「国民国家」から疎外された存在から提示された視点であるともいえるのではないか。

4. 政治体制論とソ連観の変化

『東方への旅立ち』所収の2論文以来、トゥルベツコイの論考には、単に文化論というだけに留まらない、より具体性を帯びた政治的議論が加わるようになる。その中に、彼の政治論と多義的なソ連観を見ることができ、まずは、その肯定的側面に注目しよう。

これらの論考が執筆された1921年以後の世界的状況は、トゥルベツコイに「ロシア世界」の更なる使命を見出させた。それはつまり、第一に、ヨーロッパの支配に苦しむ非ロマンス・ゲルマンの植民地世界をヨーロッパに対する抵抗において導くこと、第二に、ヨーロッパ化という「多様性の破壊者」に対して、「多様性の内包者」として自らがその模範となることである。既に「非ロマンス・ゲルマン民族の団結」「多様性の破壊者であるヨーロッパへの対抗」として語られたテーマではあるのだが、これらの議論は、論理的なつながりを保ちながらも、現実の変化によってより具体的に規定されていく。第一の「使命」は、ソヴェト政府やコミンテルンの植民地に対する立場に、第二の「使命」はソ連の連邦制の理念に重なるものであり、こうした考え方ゆえに、トゥルベツコイはソヴェト政府の打ち出した方針に対して肯定的な評価を与えるようになるのである。ゼンコフスキーが「ユーラシア主義者たちの東洋への転向は、ソビエト・ロシアが東洋に対してとった態度に思いがけなくも近いものとなった。…『植民地の』諸国民に対してヨーロッパの権力から自由になれと呼びかけるこの捉えどころのない文句は、なにかソビエトの『声明』とそれほどかけ離れているとは思えないのである。」⁷⁴と評した部分である。この部分を指してユーラシア主義、あるいはトゥルベツコイが「親ソ」的であったと判断する研究者がいることに鑑みても、トゥルベツコイがロシアに期待したことと、ソヴェト政府の打ち出した理念の部分がどのように一致していたのかを検討する必要があるだろう。

トゥルベツコイは、ロシアをヨーロッパ列強にとっての「潜在的植民地」として評する。「戦争、革命、ポリシェビキの実験はロシアに完全な経済破綻をもたらした。その復興は…外国の支援があって初めて可能になる。」⁷⁵しかし、その諸外国は「ロシアを潜在的植民地と考えている。インドはロシアより人口が多いがイギリスはこれを掌握し、アフリカはロシアよりも広いがロマンス・ゲルマンの国々によって分割された。これと同じことがロシアにも起こるだろう」⁷⁶という。ロシアは、独立を保ちつつも、援助と引き換えに外国に従属することになる。それでは、もしもソヴェト政府が期待をかけている世界革命が起これば、

74 ゼンコフスキー『ロシア思想家とヨーロッパ』188頁。

75 Trubetskoi, "Russkaia Problema," in *Nasledie*, p.329.

76 *Ibid.*, p.330.

ヨーロッパへの隷属の危険性が取り除かれるかということ、その答えは否である。社会主義も共産主義もロマンス・ゲルマン諸国に存在するような特定の社会、経済、政治的条件を前提としている。だからもし、共産主義革命が世界中で起こるとするなら、ロマンス・ゲルマンの国々は共産主義政府の完璧な例となる。それを、極度に似つかわしくない条件下で確立しようとして疲弊した「後進」ロシアは、先を行く共産主義国に完全に従属し、搾取にたえることになる。いずれにしても「未来のロシアは、インド、エジプト、モロッコのような植民地」になるのである⁽⁷⁷⁾。

そのようなロシアが生き残る道は、植民地の国々を導いてヨーロッパ諸国に対抗することにあると彼は考える。「近年、植民地において…虐げられた『現地人』たちが抗議を始めた。…ロマンス・ゲルマンのくびきからの解放の努力」が始まっており、そしてそれは「圧迫された人間性の解放」である⁽⁷⁸⁾。さらに、「トルコ、ペルシャ、アフガニスタン、インド、（それらと完全に同等ではないにせよ、ある程度は）中国と他の東アジアの諸国」では、「ポリシェビキとロシア、民族解放の理念、ロマンス・ゲルマンやヨーロッパ文明に対する抗議とを結び付けて考えている。」⁽⁷⁹⁾このような状況下であれば、ロシアが植民地世界に加わり、解放のための運動で世界的なリーダーシップを握ることが可能であると、トゥルベツコイは議論する。「ポリシェビキはロシアを植民地に貶めたが、同時に、植民地世界をロマンス・ゲルマンのくびきから解放するという、新たな歴史的役割を用意」し、「ロシアの未来の役割は、ヨーロッパの列強としてではなく、ロマンス・ゲルマンとヨーロッパ文明に対する共通の戦いにおいてアジアの同胞を導く巨大な植民地として」期待されるのである⁽⁸⁰⁾。

先に挙げた『チンギス・ハンの遺産』においても、ソヴェト政府の対アジアにおける姿勢を評価した叙述が見られる。「対外政策の分野において [注目すべきこととして]、[ソヴェト政府が]スラヴ主義と汎スラヴ主義の間違ったイデオロギーを拒絶し、ヨーロッパ列強の帝国主義的あり方の模倣を放棄したことを指摘したい。初めてロシアユーラシアの歴史の本質に合致した、正しい姿勢が東方に関してとられたのである。初めてロシアは自分を、ヨーロッパ（ロマンス・ゲルマン）文明の帝国主義国家に対する戦いにおける、アジア諸国の同盟者として認識し…初めて対等な者としてアジアに話しかけた」のである⁽⁸¹⁾。

ソヴェト政府は、欧米を始めとする資本主義世界からの脅威に対抗するために、各地に起こっていた反帝国主義的性質を持つ植民地の抵抗運動や民族運動に依存しようとしたわけだが、これらが指すのはいうまでもなく、このようなソヴェト政府の植民地諸地域に対する呼びかけと一連の政策のことである。

第一次世界大戦後、植民地諸地域では、ヨーロッパ支配への抵抗運動が相次いで起こった。トゥルベツコイが言及したように、トルコにおける民族運動、ペルシャでの民族運動と反英グループによるクーデター、反英運動と第三次アフガン戦争の結果によるアフガニスタンの独立、エジプトの独立運動、インドの非暴力抵抗運動、中国の5・4運動など、非ヨーロッパ地域では、あるものはヴェルサイユ体制下の抑圧や「民族自決」への期待を裏切られ

77 Ibid., p.333.

78 Ibid., p.334.

79 Ibid., p.335.

80 Ibid., pp.335-336.

81 Trubetskoi, *Nasledie Chingiskhana*, in *Nasledie*, p.276.

たことにより、あるものは第一次世界大戦へと動員されたことによって列強のために多大な犠牲を払ったことを一つの契機にして、民族運動や独立を目指す運動を展開するようになった。それぞれの抵抗運動には、当然それぞれの背景と経緯があるわけだが、そこに共通していたのは、ヨーロッパ列強による支配と従属的地位に苦しみ、不満を募らせた諸地域が、植民地主義に対する戦いを掲げ、あるいは旧来の国際秩序を打破しようと試みたことである。そこではしばしば、ロシア革命の影響を受けて、共産主義思想が民族解放の思想として受け取られるという側面もあった。トゥルベツコイにとってこの二つは必ずしも一致するものではなかったが、彼はこの「誤解」を、「ロシア世界」が中心となって全世界的なヨーロッパへの隷属を打破する好機と捉えたのである。

彼がソヴェト政府の政策を肯定的に評価したもう一つの点は、その連邦制の理念にある。

ソ連の連邦制は、その実態は別としても、「建て前」の上ではソ連邦内の諸民族が平等な権利を享受するという理念を制度化したものであり、例えば1924年のソ連憲法は、形式的には連邦を構成するすべての共和国に「主権」を与え、民族集団の平等を認めることを保障していた⁽⁸²⁾。

トゥルベツコイの連邦制理念への評価は、主に以下のような叙述に表れている。

「[ソヴェト政府の] 国内政策で [重要な点として]、ロシア化の放棄を指摘しよう。…ロシアユーラシアを構成する諸民族への権利の付与を公的に認め、さらに高度の自治を与えることは、ロシア人のみならず、トゥーラン人も加わるロシアの国家体制の歴史的本質に対する正しい見解に合致するものである。」⁽⁸³⁾

「革命前のロシアは、ロシア人が全領土の正式な主であるとみなされる国であった。…しかし、革命時にこの状況は変わった…歴史の論理によって、ロシア人と非ロシア人の関係は平等なものに変わり…もはやロシア人は構成員の主ではなくなり、領土内に住む平等な諸民族の一つになったのである。…ソ連邦の非ロシア人に現在与えられている権利は剥奪されるべきではない。それを奪ったり、制限しようとする試みは、激しい抵抗にあうであろう。」⁽⁸⁴⁾

スラヴとトゥーランが構成する多民族国家を導くべき理念は、共産主義思想を含むヨーロッパの模倣ではもちろんなく、特定の民族に特化した汎スラヴ主義や汎イスラム主義でもなく⁽⁸⁵⁾、ユーラシアとしての自己認識に基づいた理念であるべきであり、そして制度としての連邦制は、その多民族国家に対する「正しい」認識を反映したものとして肯定的に評価されたのである。このような高い評価には、ソ連の連邦制を成功例として礼賛するような欧米の研究と似通ったものがある⁽⁸⁶⁾。一つにはこれが、国内で起こっていた非ロシア人の「ソヴェト化」の実態を知ることができない亡命者の「外界」からの視点であることが大きな理由であろう。しかしそれと同時に、そこには、文化論をそのまま政治論に反映させようとする

82 ポリシェビキ内部における「連邦制」の構想をめぐる議論と解釈については、岩下明裕『ソビエト外交パラダイム』の研究：社会主義・主権・国際法』国際書院、1999年、33-44頁を参照。

83 Trubetskoi, *Nasledie Chingiskhana*, in *Nasledie*, pp.276-277.

84 Nikolai S. Trubetskoi, "Obshcheevraziiskii Natsionalizm," *Evraziiskaia Khronika* 9 (1927), Reprinted in *Nasledie*, pp.493-494.

85 「一部民族のナショナルイズムの遠心的力を強める汎イズムは、他の民族との単一の基準による一面的なつながりを強調する。これでは、現実の、生きた多民族国家は創れない。」Ibid., p.503.

86 例えば、Oscar Janowsky, *Nationalities and National Minorities with Special Reference to East-Central Europe* (New York: Macmillan, 1945).

る時に生じる限界も垣間見えている。

後述するように、トゥルベツコイのユーラシア主義は、狭小なナショナリズムのもたらす対立を地域全体を包摂することで乗り越えようとする思想である。ここから考えると、連邦制に移行してもなお独立志向の強い「ウクライナやゲルジアの分離主義」は、西欧的「国民国家」化願望として、また、政治的独立と「国民国家」化という目的のために文化を人為的に操作するものとして映る⁽⁸⁷⁾。しかしこれは、少数民族にとって政治的独立が持つ意味を看過することにもつながる。例えば、ロシア帝国によって数度にわたりウクライナ語の使用、出版、教育を禁じられるという経験をしたウクライナの知識人にとって政治的独立が持つ意味は、「ウクライナ文化の発展のための完全な自由が訪れる」ことであり、その二つは重ね合わせて考えられるのである⁽⁸⁸⁾。

見方によっては、このようなトゥルベツコイの考え方は、ソ連邦を擁護し、ロシア帝国以来の領土保全を支持しているとみられても無理はない。この部分を評してリャザノフスキーは、「トゥルベツコイとユーラシア主義者たちは、彼らが熱烈に信じていた偉大なロシア国家の保全も考慮していた。…ユーラシア主義者たちは、ロシア帝国の存在を否定することでこれを維持しようとした。彼らは、そこにはロシア帝国などは存在せず、調和に満ちた…ユーラシアだけがあるという。この説は、ユーラシアの国境内での分離主義の意味を失わせるものである」⁽⁸⁹⁾と解釈した。これまでに検討してきた通り、トゥルベツコイの本意は違うところにあったにせよ、そのように解釈されるだけの根拠がまさにこの点に集約されていたのである。

けれども、トゥルベツコイのソ連観は、「親ソ (Pro-Soviet)」や「反ソ (Anti-Soviet)」というような二項対立的な分類では説明のできない複雑さをもっている。

彼がロシア革命のもたらした結果やポリシェビキを一貫して批判した理由は、共産主義や社会主義というヨーロッパで生まれた理念が「ロシア世界」を導くのにふさわしくなく、これに依拠したロシア革命は、独自の文化圏であるユーラシアをヨーロッパ化するに過ぎない、という点にある。ロシアはそれまでも、ロシア帝国の時代を通じて、ヨーロッパに追いつくことを目指し、先進性が高いと思われる思想をいわば「輸入」しては革命と反動の歴史を繰り返してきたが、しかし思想とは本来、自然に醸成される土壤があるべきものである。その条件を欠いて、根を持たない思想を強制的に植え付けても、実りがないどころか有害でさえある。トゥルベツコイはこのように考えていたのではないだろうか。

トゥルベツコイの共産主義批判、ポリシェビキ批判にはもう一つの要素がある。共産主義の思想にもロマンス・ゲルマン的「自己中心主義」は潜んでおり、それが、プロレタリアート以外の階級を認めない共産主義者の排他的な姿勢に表れているというのが、その論旨である。例えばそれは、「ソ連邦を構成する人民の中で、プロレタリアートだけが一人前の市民

87 例えば、ウクライナの文化について以下のように述べている。[[ロシア文化を吸収することを拒み、あらゆるロシア的なものを憎むような状況下で創られた] ウクライナ文化は、衰退していくであろうし、それ自体が目的としてではなく、政治の道具として存在しているに過ぎない] Trubetskoi, "K Ukrainskoi Probleme," in *Nasledie*, p.426.

88 Dmytro I. Doroshenko, "Po Povodu Stat'i kn. N. S. Trubestkogo 'K Ukrainskoi Probleme,'" *Evraziiskii Vremennik* 5 (1927), Reprinted in *Nasledie*, p.451.

89 Riazanovsky, "Prince N.S. Trubetskoy's 'Europe and Mankind,'" p.215.

であるとされており、しかしソ連自体の中にプロレタリアートはそう多くない⁽⁹⁰⁾というように、数的には決して多くない⁽⁹¹⁾にも拘わらず、プロレタリアートのみが優れた階級であり、権利を与えられた支配階級たるべきとする思考に、彼はロシアの現実に見合わない「自己中心主義」を嗅ぎ取ったのである。

このような批判の上に立って、ユーラシアのような多民族地域をまとめるには、特定の社会的理想、つまり「階級」では不十分であるとトゥルベツコイはいう。その代案として、多民族国家ロシアの「ユーラシア」としてのナショナリズムを、彼は次のように主張する。「結局のところ、かつてのロシア帝国、現在ソ連邦として知られる国家の民族的基層は、そこに住む人々の総体でしかありえなく、それは特殊な多民族国家であり、それ自身のナショナリズムを持っていると考えられる。」⁽⁹²⁾ある一つの民族集団を自分の帰属するものとして強調し、他の民族に対する優位性を主張するような「偽のナショナリズム」は、「自己中心主義」にとらわれた分離主義に陥ってしまう。それは、ショーピニズムでしかあり得ない。それを避けるためには、より大きな総体のナショナリズムと組み合わせられ、融合されることが有効である。ユーラシアに住む人々が特定の民族集団だけでなく、「ユーラシア諸民族」に属していることを認識することで、彼らの民族的誇りは双方向で満たされる。そこで、彼の思想の中では、「ユーラシア」を束ね、導くべきは、「全ユーラシア的ナショナリズム」なであるとされる⁽⁹³⁾。

これが、トゥルベツコイが「ロシア世界」にふさわしいと考えた理念の内容部分であった。それでは、それを実際に担う政治体制についてはどのように考えていたのだろうか。

トゥルベツコイの政治体制観を知る上で、重要な概念となるのが「理念統治 (ideokratiia)」である。「理念統治」という概念がトゥルベツコイの著作に初めて現れるのは、1927年に書かれた「国家機構と統治形態について」という論文の中であった。そもそも「理念統治」とは、彼の文脈においては、民衆の意向を反映する特定の理念を掲げ、その理念を代弁する統治層(あるいは政党)によって行われる政治のことで、その政府は多くの人々に支持され、人々の利益のために行動しなくてはならない、というものである。「理念統治」の基本は、「国家として組織された人間社会を生きた統一体としてみる」ことで、その下では、「事実上、政治、経済、社会、文化生活を統治する特別な統治層の存在を前提とし」、そしてその統治層は「共通の世界観をもった人々から成り立って」おり、そこでは「政府の、市民生活や文化発展への積極的参加」があるべきであるという⁽⁹⁴⁾。

1927年以前の論文にも、政治体制に精神的基礎を与えることを主張するものはあった。1925年の『チンギス・ハンの遺産』では「ピョートル大帝以前のモスクワ公国時代に生活の基礎となっていた諸原則は、将来の建設においてもその基礎に据えられる。中でも重要な

90 Trubetskoi, "Obshcheevraziiskii Natsionalizm," in *Nasledie*, p.496.

91 1914年当時で(フィンランドを除く)ロシアの人口(約1億7千万人)のうち、約85%は農民が占めており、産業労働者は約1.7%に過ぎなかったといわれる。George Vernadsky, *A History of Russia*, 6th rev. ed. (New Haven: Yale University Press, 1969), p.242; David Mackenzie and Michael W. Curran, *A History of Russia: The Soviet Union and Beyond*, 4th ed. (Belmont: Wadsworth Publishing Company, 1993), p.490.

92 Trubetskoi, "Obshcheevraziiskii Natsionalizm," in *Nasledie*, p.500.

93 Ibid., pp.501-502.

94 Nikolai S. Trubetskoi, "O Gosudarstvennom Stroe i Forme Pravleniia," *Evrasiiskaia Khronika* 8 (1927), Reprinted in *Nasledie*, pp.482, 487, 489.

のは、個人の生活様式と国家と宗教との緊密なつながりであり、無神論的で反宗教的な政府は、(彼らはそれを「進歩」と考えるが) 実に西欧的な発明なのである」⁽⁹⁵⁾と述べていたし、1923年の「戸口にて」の中にも、「我々ロシア人はまず、ヨーロッパの政治思想の形態を放棄し、異質な『統治形態』を崇拜することをやめ…近代のあらゆる社会的、政治的イデオロギーがそれに基づいていたとしても、人間社会を魂のないメカニズムとして見ることをやめるべきである。将来の理想は、完全な正統性ではなく、[特有の]生活様式と安定したイデオロギーを通じて政府を創り、確立させる精神の中に見出されなくてはならない。」⁽⁹⁶⁾とある。政治体制と宗教的世界観に基づいた個人の日常生活の不可分なつながりを理想とし、西欧的「先進性」を模倣することをやめて、かつてあった「自分らしさ」を見直すべきだという彼の考え方は、ここにも窺われる。

しかし、そのような「ロシア世界」にふさわしい精神的基礎をもった統治形態として「理念統治」が提唱されるのは、上の1927年の論文が初めてである。「理念統治」論はトゥルベツコイの中でも未完成であり、全体的に漠然としたものであるため、ユーラシア主義の他の部分との有機的連関性が明らかでないという批判があるかも知れない。また、研究者によっても評価の分かれるところである。しかし、少なくともこの議論がどのような背景から生まれてきたかを読み取ることはできる。

その主たるものが、西欧的政治体制に対する批判である。トゥルベツコイによれば、ヨーロッパ文明世界における政治体制の選択肢は二つある。一つは貴族政治(アリストクラシー)であり、もう一つは民主政治(デモクラシー)である。少数による「老人政治」でもある貴族政治は、今日ではもはやあり得ない。民主主義は、形式的には社会全体の意見の反映を掲げているが、実際には金権政治と化しており、本当の意味で実態を伴っているヨーロッパの国はない。「議会制の危機」「民主主義の危機」は疑う余地のない事実である。そして、「貴族政治は死んだが、[西欧]民主主義も死に近づいている。我々は、新しいタイプの選択肢を創る時代に生きているのである」⁽⁹⁷⁾と論じているのである。1920年代のヨーロッパでは、それまで参政権の拡大にも対応することなく進んできた議会制民主主義が、労働者階級の意向を汲み上げることができない実情に対する批判と不満が噴出していった。例えば、1920年3月のドイツでのゼネラル・ストライキ、9月のイタリアでの工場占領、12月のチェコスロヴァキアでのゼネラル・ストライキ、1923年にはドイツ共産党が権力奪取を試み、イギリスでは1919年から始まっていた炭鉱労働者の抵抗が1926年のゼネラル・ストライキを頂点として盛り上がった。少し後のことになるが、トゥルベツコイの住んでいたウィーンにおいても、1927年7月に労働者のデモが起こり、死者100人を出す武力衝突にまで発展するという出来事があった。このような労働運動の高まりの背景にあったのは、資本主義の矛盾を解決できない議会制民主主義の問題であり、ロシア革命の影響がヨーロッパの社会全体に波及する中、それが不況や経済危機を機に各国内で顕在化したのである。議会制民主主義の形骸化を示すその最たる例が、「史上最も民主的」な憲法を持つといわれたワイマール共和

95 Trubetskoi, *Nasledie Chingiskhana*, in *Nasledie*, p.289.

96 Nikolai S. Trubetskoi, "U Dveri, Reaktsiia? Revoliutsiia?" *Evrasiiskii Vremennik* 3 (1923), Reprinted in *Nasledie*, p.366.

97 Trubetskoi, "O Gosudarstvennom Stroie i Forme Pravleniia," pp.482-487.

国であった。国民の大多数を占める労働者の意見を代弁する機能を持つはずの諸政党は、それ自体が「寡頭支配体制」と化し⁹⁸⁾、極端な多党化は、それぞれの勢力の分散や利害の不一致を生み、政党政治は支配層の政争の場となっていった。産業界は、自分たちに有利に働くように議員への資金援助を通じて影響力を行使し、最終的に独占資本は政治的にも経済的にもその支配を固めたのである。こうして、本来議会制民主主義によって汲み上げられるはずであった労働者の不満は、解消されるどころか膨れ続けていった。議会制民主主義に対する大衆の不信と無力感が浸透した末、「史上最も民主的」な憲法を持つ国から、ナチズムが台頭してくるという下地が用意されたのである。このように、少数の個人がそれぞれの利益を政治に反映させることに腐心し、本来期待される役割を果たせなくなっていた西欧的議会制民主主義に対し、一般大衆の民意の反映を別の政治形態に求めたという点に限っていえば、トゥルベツコイの「理念統治」論は、「指導者原理」や「サンディカリズムによる直接民主主義」を掲げたファシズムや、プロレタリア独裁による階級対立の克服を謳った社会主義体制を生んだ、その同じ政治潮流の中にあったといえよう。

トゥルベツコイの議論からは、労働者の問題に対する意識・関心を読み取ることは難しいという批判があるかも知れない。しかし、いわゆる「民主主義の危機」は、拡げて見ると単に西欧だけに限られるものではなかった。現象的には、中・東欧の新興独立諸国で、「西欧民主主義」的な政治体制が根付かず、混乱の收拾を大義に、国王独裁や権威主義的体制への移行が起こっていたことも見逃すわけにはいかない。1926年ポーランドでは、農民問題にも失業者の増大にも対処できず、諸政党が政争を繰り返す議会に対し、「ファシスト政権」といわれるピウスツキのクーデターが成功した。ブルガリアでは1924年に共産党による蜂起を機に、これを鎮圧したツァンコフ政権が政治的弾圧を行うようになっていった。ユーゴスラヴィア（セルブ・クロアト・スロヴェン王国）では1929年に、ルーマニアでは1937年に国王独裁が始められた。いずれも、中・東欧にとっての課題である農民問題や少数民族問題を解決に導くことができず、政争の場と化してしまった議会における矛盾の発現であり、これは西欧民主主義が中・東欧の現実とそぐわないのではないかという疑問を呼び起こした。この点においても、トゥルベツコイの政治体制論は、「国民国家」が持つ政治体制への批判としての意味を持ち、その文化論と表裏一体を成していたといえよう。

このような政治体制観が展開される中で、一定のソ連観の変化がトゥルベツコイの議論に生じていることを指摘しておかねばならない。

第一に、先に概観したような共産主義とポリシェビキに対する批判は終始一貫して続けられたが、1920年代も後半に入ると、ソ連の国家としての存在を認めるようになったことが挙げられる。このような変化は、レーニンの死後もポリシェビキが国内の支配を崩さず、資本主義世界からの脅威の中でもソ連が国家として存続し続けている事実を、トゥルベツコイが認めざるをえない状況にあったことを物語る。ただし、なぜポリシェビキによる体制が成立し、存続しえたのかという、その存在合理性についてはあまり考察されていない。

第二に、「理念統治」の制度という観点から、ソ連への評価に変化が生じたことである。トゥルベツコイは、統治層と民衆の間に乖離が生じていないことを重視した。故に、理念の

98 ワイマール共和国の政党政治問題に関しては諸説あるが、ここでは、栗原優「ヴァイマル共和国の安定とその破綻」『岩波講座 世界歴史』第26巻、現代3、岩波書店、1970年、38-45頁を参照。

内容として共産主義は認められないが、西欧民主主義的な手続を通じた民意の反映とは一線を画したその制度の上では、ソ連が「理念統治の機能」を持っているということを評価するに至ったということである。また、同じ「理念統治」に近い制度を持つイタリア・ファシズムとの対比においても、「極端なイタリア民族の神格化と生物学的〔特別な〕存在としての露骨な自己確立に帰着し」「共通の世界観を創り出せずにいる」イタリアを批判する一方で、ソ連においては「世界観の一致が統治層の中にはある」点について一定の評価を与える、というように、人種主義に訴えるファシズムへの反発を強める中で、ソ連への評価が相対的に上がっていることも指摘できる⁹⁹⁾。

このようなソ連観の変化が示すのは、彼の思想の中でも、現実の政治状況から影響を受けざるを得なかった側面である。これは往々に言われてきたように、必ずしも「親ソ」「反ソ」、あるいは「反ソから親ソへ」といった単純なカテゴリーに括られ、評価されるべきものではない。

結論

ロシアを「ヨーロッパでもアジアでもないユーラシア」と定義したユーラシア主義の歴史的起源ともいえるトゥルベツコイの文化論は、多民族が共生するカフカスを原風景に、対内的、対外的に「多様性の破壊者」である西欧文明への批判に立脚しながら形成され、革命に続く亡命経験という内在的契機を得て、戦間期のヨーロッパにおいて近代「国民国家」批判として展開した。概して「反ソ」「親ソ」という括り方の中で論じられがちなその政治論も、トゥルベツコイの議論においては「民主主義の危機」を背景に、その「国民国家」が持つ政治体制に対する批判として形成されたものであることが明らかになった。

1930年代の激動に向かう過渡期でもある1920年代、ユーラシア主義者たちがいみじくも「地殻変動」¹⁰⁰⁾と呼んだこの変革の時代には、新しい「秩序」の構築と地域の再編、あるいは政治体制そのものへの根本的問い直しの試みの中に、様々な思想潮流が生まれた。ユーラシア主義の文化論は、対立を孕む「国民国家」やナショナリズムを超克しようとする試みという意味では「欧州合衆国」案や中・東欧の連邦構想などと軌を一にし、形骸化した議会制民主主義への挑戦という点に限って言えば、その政治論はファシズムや社会主義体制と同様の問題意識を共有するものとして位置付けることができる。それはまさに、ロシアとヨーロッパの狭間に生まれ、亡命者という「個人」の視点から地域のあり方を問い、さらには地域の視点から「国民国家」ひいてはその「国民国家」から成る近代国際関係そのものを問い直す思想としての意味を持つのである。

トゥルベツコイのユーラシア主義が、「国民国家」としてのソ連が崩壊した後の時代に研究者の注意を惹いたのには、単に「ロシアとは何か」という問いに対する答えとしてだけでなく、「国民国家」のもたらす対立を乗り越えるための道を模索する視座がそこに含まれていたからではなかったか。この仮説を実証することは、他のユーラシア主義者たちの議論を明らかにすることと共に、筆者の今後の課題としたい。

99 Trubetskoi, "O Gosudarstvennom Store i Forme Pravleniia," in *Nasledie*, pp.487-488.

100 *Iskhod k Vostoku*, p. iii.

N.S. Trubetskoi's Eurasianism as a Criticism of the "Nation-state"

HAMA Yukiko

The aim of this paper is to reevaluate Eurasianism from a historical perspective.

It was precisely Eurasianism that defined Russia as "Eurasia," neither Europe nor Asia, for the first time in the intellectual history of Russia. Up to this time, Russian thinkers had identified "Asiatic" elements of Russia with "backwardness" or something "barbarous." They had not admitted its "inner Asia." In other words, Eurasianism can be regarded as a new self-identification of Russia. This change in the Russian view of Asia has attracted much attention among scholars and there is a good deal of discussion on this topic. Usually, however, Eurasianism has been regarded as a branch of Slavophiles, and very few attempts have been made to provide any convincing answer to the question of why Eurasianism emerged during the Inter-war period in a particular group of Russian emigres. Much work remains to be done to elucidate the historical origin of Eurasianism.

There are some difficulties in studying Eurasianism: Eurasianists differ from each other in terms of both approach and specialty; the development of Eurasian movements has a complicated history; Eurasianism, in general, is characterized by the lack of coherence in political views. Riazanovsky was correct in stating that "the full answer could be given only after a detailed study of each individual case." In order to overcome these problems, this paper focuses on N.S. Trubetskoi, one of the founders of Eurasianism and a famous linguist. It considers the formation and development of his ideas, referring to a brief biography and the historical background of this period. Viewed from such a perspective, this paper will shed light on the significant aspects of Eurasianism and try to find out its historical origin.

Trubetskoi began his discussion by criticizing Western civilization, saying it would destroy national and cultural diversity due to its "egocentrism." He assumed that every national culture was equally valuable in its own uniqueness. He developed this notion as a result of his life work on the cultures and languages of the Caucasus. From his viewpoint, a "top-down" Europeanization of non-European society leads to the destruction of uniqueness, whether it is compulsory or voluntary. The fact that he blamed the Russian Revolution for the Europeanization of Russia deserves attention, because he regarded Communism as a Europe-made idea, which was not suitable for Russia.

While Europe encouraged uniformity, Russia, by contrast, preserved its ethnic and cultural diversity. This feature of Russia should be maintained, he said. Thereby, diversity lies at the core of his Eurasianism. It seems reasonable to suppose that he reached this conclusion through searching for the identity of Russia and considering how it should be even after his exile.

Generally, Trubetskoi's Eurasianism reflected contemporary historical circumstances. He denied "self-determination" without proper self-recognition of each nation and also any "internationalism" which essentially revealed "egocentrism." At the same time, he warned that any intolerant nationalism might cause antagonism. In this respect, Eurasianism can be interpreted as a criticism of the modern "nation-state," which presupposes the homogeneity of the nation in its territory. Actually, the new states born in Central and Eastern Europe aimed at nation-building modeled after Western Europe and it inevitably caused serious problems among those states. Eurasianism intended to overcome this "false nationalism" by subsuming the whole. It may be said that Eurasianism was certainly a design proposed by emigres, who were alienated by the "nation-state."

There is another aspect worth remarking: Trubetskoi's concept of "ideocracy" emerged as a criticism of Western political system. "Ideocracy" was a kind of system that the ruling party governs people on the basis of certain demotic and moral ideas. As he admitted, it had much similarity to Socialism and Fascism in terms of the political system. Of particular relevance here was the so-called "crisis of democracy." In Europe during the Inter-war period, people suffered from the devastating damage of World War I. The parliamentary democracy, which turned out to be meaningless for the people, encountered a serious challenge: the rising tide of the labor movement and the emergence of Fascism. While the colonial peoples rose up to achieve independence, the impact of the Russian Revolution was tremendous there. Except for the above remarks, which may certainly clarify some background of "Ideocracy," it must be particularly mentioned that Trubetskoi blamed racism, to which Fascism appealed, as the most inadmissible "egocentrism." When considered in this light, it is understandable why Trubetskoi's view of the Soviet relatively and gradually improved. Indeed, the matter is not as simple as preceding scholars have tended to conclude with descriptions of "Pro-Soviet" or "Anti-Soviet." Certainly, Trubetskoi's Eurasianism evolved under the conditions of the inter-war period.